防衛大学校フィールドホッケー部

創設６０周年記念誌

「歴史と伝統：未来へ繋ぐ」

目　次

創設６０周年に寄せて―特別寄稿―

防衛大学校フィールドホッケー部の伝統を未来に繋ぐ	防衛大学校フィールドホッケー部部長		宮　田　喜　壽	２
未来につなぐ	小原台ホッケークラブ会長		福　井　正　明	３
防大ホッケー部６０周年に寄せて	第７代部長		北　島　正　弘	５
創設期のこと	第２代会長	第　７期	山　口　賢　介	７
その時、どう思い・どうしたのか	第４代会長	第１３期	関　芳　雄	９
防衛大学校フィールドホッケー部創設６０周年に寄せて		第２７期	佐　藤　正　久	１１
事務局員としての１０年間	前小原台ホッケークラブ事務局長	第３６期	大　野　真	１３

―寄稿―

一枚の写真	第１６期	池　田　廣　春	１５
「防大ホッケー部の特色・武器は走力」―三沢高校ホッケー部との繋がり―	第２５期	上　田　知　元	１６
防大ホッケーの伝統の継承と不易流行	第３５期	武　田　敏　裕	１７
フィールドホッケー部の総監督	第４２期	末　本　紀　彦	１８
伝統の継承にあたり	第４３期	向　田　淳	１９
ホッケーを通じて	第４８期	佐　藤　夏　樹	２０
ホッケー部創設６０周年に寄せて	第４８期	渡　辺　智　江	２１
「現代ホッケー」の中で勝ち抜くためには	第５２期	久木田　知　也	２２
創設６０周年に寄せて	第５５期	大久保　亜李沙	２４
創設６０周年に寄せて	第５６期	小　野　俊　輔	２５
私にとっての防大フィールドホッケー部	第５７期	宗　形　勇　希	２６
防大ホッケー部創設６０周年に寄せて	第５８期	駒　野　成　俊	２７
ホッケーを通じての現在	第５９期	白　簇　あず沙	２７
ホッケーと出会って	第６０期	木　谷　将　人	２８
ホッケー部創設６０周年に寄せて	第６１期	佐々木　誠	２９
創設６０周年に寄せて	第６２期	出　水　里　奈	３０
防大ホッケーのあるべき姿	第６３期	園　井　寧　人	３１
創設６０周年に寄せて	第６３期	中　畑　美　紀	３２

競技規則等の変遷 ３３

期別写真集 ３７

イベント写真集 ４１

５０～６０年戦績記録 ４２

歴代部長、監督、主将、主務 ４９

小原台ホッケークラブ会員等名簿 ５４

創設６０周年記念行事実行委員会 ６９

編集後記 ７０

創設６０周年に寄せて－特別寄稿－

防衛大学校フィールドホッケー部の伝統を未来に繋ぐ

防衛大学校フィールドホッケー部部長　　宮田　喜壽

防衛大学校フィールドホッケー部がいわゆる還暦を迎えますこと、誠におめでとうございます。この記念の時を迎え、これまで部の育成と発展にご尽力された関係者の皆様にお祝い申し上げますとともに、心よりの感謝の意を表します。

防衛大学校（以後、防大）において、校友会活動は教育・訓練や学生舎生活とともに学生教育の三本柱と位置づけられています。様々な委員会、部、同好会が積極的な活動を行っていますが、その中でもフィールドホッケー（以降、ホッケー）部は、輝かしい戦績と多方面に多くの人材を輩出した点において、傑出した存在であることは間違いありません。ホッケーの競技知名度やグランド条件など決して恵まれているとはいえないにも関わらず、部が現在の姿にあるのは、この部が高い帰属意識を共有できる組織であり続けてきたからに他なりません。防大卒業生にとって卒業期別はまさしく背番号ですが、それよりもホッケー部出身であることを大事にしているＯＢ・ＯＧの皆さんが多いことを私は知っています。かく言う私も、事あるごとに自分はホッケー部の部長を仰せつかっていることを防大の学生や職員はもちろん自分の専門学会の仲間にも主張・自慢しています。この部の魅力をＯＢ・ＯＧの方に尋ねますと、皆さん異なることを話されます。その多様性と奥深さこそが防大ホッケー部の誇れるところだと思います。

区切りの年を迎え、これまでの六十年の伝統を次の十年にどう繋げるかをみんなで考える時がきました。このような時、防大における校友会、大学教育における運動部の位置づけまで立ち返り考えることが大事ではないでしょうか。戦後間もない時期に、英国のカレッジ制度や諸外国の士官学校を参考にしつつも、我が国独自の士官育成機関として防大が創設されました。その三本柱に運動部を中心とした校友会が位置付けたのはなぜか、明治期における旧帝国大学や私立大学の創設時から、エリート教育における運動部の重要性が認識され続けられた理由は何かをよく考える必要があると思います。防大の学生綱領「廉恥・真勇・礼節」は学生自らによって長い年月をかけた議論を経て定められました。現役学生諸君もこの問題を真剣に考え、次の十年に繋いでいただきたいと思います。

今後も防衛大学校フィールドホッケー部が持続的に発展していくためには、現役学生の努力と挑戦はもちろんですが、ＯＢ・ＯＧ諸氏も含め多くの方々のご協力、ご支援が欠かすことができません。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。最後に、この記念誌が防大ホッケー部の一里塚となり、これからの活動の起点になることも合わせて期待いたします。

未来につなぐ

小原台ホッケークラブ会長　第２２期生　福井　正明

我が防衛大学校フィールドホッケー部が創設６０周年を迎えました。人で例えると「還暦」であり、生まれた干支に戻る年。まさに新たな出発の時です。

日本におけるホッケーの歴史は、１９０６年に英国人牧師のウィリアム・Ｔ・グレー氏が慶応義塾においてクラブを設立したことに始まり、１９２３年には、陸軍戸山学校で第１回全国選手権が開催されました。我が防衛大学校では１９５９年に、初代槇智雄校長の指導により、慶応義塾大学ＯＢで全日本選手としても活躍された船越治三郎氏を監督に、４期生が主体となってホッケー同好会が創設されました。

その後１３期生の時代には、関東学生ホッケーリーグで明大と同率の優勝を勝ち取る等、１部リーグで活躍してきました。防大ホッケーの特徴は、入校後初めてホッケーを知ったという未経験者が大半を占めるチームであることから、技量では劣るものの「走り勝つホッケー」と「粘り強さ」で他大学を圧倒し、チームが一丸となって必勝の信念を持って戦うというスタイルでした。

私自身の経験を思い起こせば、１１期生以降１部リーグで戦い続けてきた防大が、１０年ぶりに２部に降格したのが２２期生ホッケーの始まりでした。それは３年の秋季リーグ、１部最下位となり、学習院大学との入替戦でのこと。１対１で迎えた後半、サークル外からと思われたヒットをキーパーがスルーしたところ「ゴール」の判定が・・・。抗議は認められず、残り時間で必死に反撃したものの及ばず敗退し、２部への降格となりました。

２部に降格しても次のリーグでは、必ず１部昇格を果たすというのが当時の部員全員の認識でした。春休み期間の全てを合宿練習として鍛え、必勝の信念で春季リーグに臨んだ結果、２部で優勝し入替戦にも勝利して１部に返り咲くことができました。それからの防大は１部リーグで戦いを続け、２７期生の時には、天理大学を破って全日本学生選手権で準優勝という輝かしい成績も残しました。

また平成６年からは、女子も関東学生リーグに参戦しており、部員数確保に苦労しながらも、昨年には１部リーグでの戦いを展開してくれました。平成１５年以降、男子は２部リーグでの戦いが続き、１部への昇格が遠のいている中での朗報です。

最近のホッケーは、大幅なルール改正とともに、人工芝での試合が常態になっています。平成１８年以降は、関東学生リーグ全ての試合が人工芝で実施されており、我々がプレーしたホッケーとは別格のような気がします。防大グランドも石ころが多かった昔とは違って整備されましたが、やはり人工芝グランドが不可欠であると思います。今後とも小原台ホッケークラブとして機会あるごとに人工芝グランドの実現に向けて支援していきたいと考えています。

さて防大の「走り勝つ粘り強いホッケー」には、厳しい練習が必要でした。夏合宿では、暑さと苦しさに闘いながらも懸命に練習した記憶があります。練習試合で高校生チームに負けた時、宿舎まで 10 キロ以上の道のりをフラフラになりながらも走って帰った経験は、試合での持久力と精神的な粘り強さにつながりました。防大卒業時に先輩コーチから「ホッケー部での練習を思い出せば、自衛隊勤務でそれ以上の厳しいものは無い」と激励された覚えがありま

が、その後航空自衛官としての勤務を経験して、確かに苦しい場面を乗り越えられたのも、ホッケー部の厳しい練習に耐え抜いた自信によるものだったと感じます。ホッケーを通じで培った体力と精神力、とりわけ忍耐力が自衛官としての勤務でも大いに役立ったのではないかと、退官した今になって思い返されます。学生時代には、つらく苦しい練習の連続であったように記憶していますが、それに真っ向から挑戦するという経験が、将来の肥やしになることを学生達には伝えたいものです。

また防大ホッケー部のもう一つの特徴として、グランドの外でも後輩を大切にするという強い絆があることではないでしょうか。学生時代も卒業後も「ホッケー部」と言えば、必ず後輩の面倒を見るという気風があったように思います。私自身も多くの先輩から大切にされ、育てていただいたと思います。

人は様々なつながりを持って生きています。ホッケーとの出会いもその一つでしょう。現役学生の試合に声援を送る先輩も、かつては同じ苦労をしながらプレーした経験を持っており、ホッケーを通じてつながっています。今後ともこのつながりを深めながら、還暦を迎えた防大ホッケー部の更なる発展を期待して、６０周年をお祝いしたいと思います。

防大ホッケー部６０周年に寄せて

第７代部長　北島　正弘

私が防大ホッケー部とともにあった時期は、教官として防大に在任した 2008 年から 2013 年の５年間です。はじめは顧問として、そのうち３年足らずの短い間ですが部長を務めさせて頂きました。５年という時間はとても短く、伝統のある防大ホッケー部について（大所高所から）何かを語ることはとても出来ません。そこで、顧問になった経緯やその間の良き思い出を、当時を振り返りつつ、かいつまんで述べることにします（防大を定年してから早や５年、記憶に曖昧のところはありますが、その点はご容赦ください）。

まず、防大出身者でなく、また長く防大にいたわけでもない私が何故顧問になったのか？結局は縁があったということです。私も学生時代の４年間ホッケーをしていました。赴任時（2008 年春）、このことを伝え聞かれた当時総監督上田光一郎さん（30 期）から声をかけられたのが始まりです。

その後、グランドに練習を見に行ったり、週末の試合には応援に行ったりすることもありました。この時の最初の“驚き”は、～30 年振りの見たホッケーが、私の思っていた（昔の）ホッケーとは趣が異なるということです。いくつかの“妄想”が私の心中に生まれました：　例えば、交代自由：（私の学生時代に）これが出来たなら、もっと動けた（はず）；リバースヒット：スティックの縁の部分で体の左側のボールをヒットするこの技があれば、もっと点が取れた（はず）（一応は、FW でしたので）；人工芝：ボールがバウンドしないので、安定したストップとボールタッチで華麗なドリブル突破ができた（はず）、等々見果てぬ夢のようなことです！冗談は置き、顧問になった１年目、久方振りに見たホッケーの試合は確か対武蔵戦（男子）だったと思います。朝槻君（54 期）が中心のチームで、結果は勝利でした。勝ち試合に立ち会う嬉しさに加え、その時強く感じたことは“身びいきの”チームを持つことは大変幸せなことである、ということを実感したことです。

２年目（2009 年度）に入ると、新総監督の野村さん（29 期）から「女子部の副部長になりませんか」と言われました。女子のホッケーについては殆ど知識がありませんでしたが、（何はともあれ）引き受けました。これが女子部との関係の始まりです。

【脱線：女子ホッケーと言えば、わが国でも女子のホッケーを本格化させようとの機運が生まれたのは丁度私の学生時代の終わりころだったかと思います。その頃は、私は札幌にいましたが、勇崎兄弟や西村始めオリンピック選手がゴロゴロいて、その上の世代でも往年名選手（名前はよく覚えていませんが、確か黒崎さん？）が大会に来ていたのを覚えています。彼らが中心になって推進したのだと思います。はじめられたばかりで（多分に無理やり集められたかもしれません？）、当時の女子選手は弱くて、これ試合ができるのかと心配なくらいでした。その頃を思うと、今の女子ホッケーは隔世の感があります。】

グランドの練習や週末の試合の応援、また合宿に参加する機会もありました。自然と、徐々に部員や監督、コーチの方々との距離も近づいてきました。同時に、スティックを握りたい気持ちも（じわじわながら）涌いてきました：若い時の４年間のホッケー生活の記憶は心身とも消え去りはしないようです。

シーズンオフになると、たまにグランドに出るようになりました。と言っても、はじめはＧＫ（壺屋君（56 期））の練習に軽く付き合う程度でした。スティックでボールを転がして遊ん

でいたこともあります。ある時、女子部の監督であった石橋さん（33 期）が「練習に参加したら如何ですか？」と声をかけてくれました。おっかなびっくりの参加でしたが、私のホッケーの練習は退官後（2013 年）も２、３年続くことになりました。当時の監督、コーチ、選手（男女とも）の皆さんは、（迷惑をおかけしたとは思いますが）とてもやさしく接してくれました。偶々いいヒットを打てた時などは必ず誰かがほめてくれました。あり難いことです。という訳で、ついついその気になった次第です。多い時には、週３日も出たこともあります。

学生とホッケーとともに時間を共有し、時には青春時代を思い出したりして、とにかく楽しかったのだと思います。はじめは褒めが主体であった部員たちも、池田さんや岸田さん（57 期）らの政権になると要求レベルが段々高くなり、練習もきつくなりました。今となっては、それもまた楽しい思い出です。それにしても、特に 55 期から 60 期までの学生諸君と監督であった金野さん（40 期）や服部さん（51 期）（名前は１人１人あげられませんが）は私の練習に本当に良く付き合ってくれました。感謝します。

そうこうするうち（2010 年１月ころ）当時部長の大野先生から退官までの３年間程度部長をやらないかとのお話しがありました。ホッケーを通して、何か役に立てないかという気持ちで、引受けたことを覚えています。この年のシーズンで戸惑ったことは、女子は１部昇格、一方男子は３部降格になったことです（男子は次シーズンに２部復帰となりましたが）。複雑な心境でした（良いこととそうでないことがほぼ同時起こることは人生においてままあることですが）。この件もあって、関ＯＢ会長や福井副会長（現会長）と初めてお会いすることが出来ました。関会長とは同世代でもあり、話もよく合ったと思います。その後も楽しくお話が出来ました。問題が起きるたびに適切なご助言を頂けたことは、大変ありがたい思いでした。

まだまだ書き足らないことはありますが、規定を十分に超過しているようですので、この辺にしましょう。

教官最後の年（2012 年度）の秋シーズンが終わった時、部長を宮田現部長に引き継いで頂きました。その後数年しても、時折頭をかすめる「気になること」が３つほどあります。１）部員数の確保：当時の野村総監督と宮田副部長（現部長）が中心になって、「新入部員効率的獲得システム（私の勝手な命名）」が作られ、それが現在も機能していると聞いています。部員がいなければ、部もなくなります。指導部の方々、システムの継続、時には改善を怠らなきようお願いします（僭越ながら）。２）会計の問題：私が部長の時、２回部費などの使途不明（あるいは帳尻側が合わない）問題がありました。これも“watch”を怠らないようお願いします。３）グランド問題：ご存知の通り、現在は陸上部との共用のため、練習時間の制限および投擲による危険性等が問題です。これは予算、敷地の問題に加えて“学内政治”が絡まる事柄ですので、極めて難しい問題です。これまでの長い努力がなされてきたことは十分承知していますが、（これも僭越ですが）今後も継続くださるようお願いします。

2012 年８月の夏合宿（月夜野）

服部監督（51 期）及び
57 期から 60 期までの女子部員

創設期のこと

第２代会長　第７期生　山口　賢介

防大ホッケー部が創設６０周年を迎えました。人生に喩えると還暦、誠にめでたく皆様と一緒に喜びたいと思います。

福井ＯＢ会長から創設期の思い出など執筆してほしいとの依頼を受け、一度は他の先輩方に投稿してもらうよう打診して頂いたのですが、結局私の所にお鉢が回ってきて、書かざるを得なくなりました。先輩方のお許しを得て思い出すままに書くことにしますが、何しろ随分昔のことで、記憶も定かではありませんので、間違いがあればお許し願いたいと思います。

ご存知のように、防大ホッケー部ができたのは、４期生が４学年の時（昭和３４年）でした。当時、防大本館に勤務しておられた事務官の船越治三郎氏は慶応大学で鳴らした名選手でして、我が国に最初にホッケーが導入されたのが、陸軍戸山学校と慶応だった関係上、防大にもホッケーを導入したいと考えたそうです。幸い学校長の槇智雄先生も慶応出身で、イギリス発祥の紳士のスポーツとして理解が深く、早速組織づくりに着手されたそうです。（我が国のホッケーの歴史については、１１期生の井本君が詳しく書き残しておられるので是非参考にして下さい。）

組織づくりに必要なのは、人・物・金等であることは言うまでもありませんが、施設・物については、陸上競技場フィールドを使用することを認めてもらい、ゴール・ライン引き、整地用トンボ、ローラーなどを備え、ユニフォーム、スティック、ボール、キーパー用レガース、すねあて等々、他の学校が羨むくらい潤沢に用意されました。人（指導部）については、船越氏を監督に、加藤氏を初代部長になって頂き、本館勤務の東京農大ＯＢの鈴木微事務官、途中から早稲田大学ＯＢで全日本の選手として船越氏等と共に活躍された早川和義２海尉（小隊指導教官）等、錚々たる方々をコーチとして据え、他の大学から防大は５年後ぐらいには相当の順位まで成績を上げるだろうと言われたそうです。

ところが、一番の問題は部員集めです。高校時代の経験者は一人もおらず、見たこともないスポーツ、しかも殆どの学生がすでに何らかの部に入っているので、新しい部員を勧誘するのは大変だったようです。そこで、船越氏から口説き落とされた４期生の中川修さん（当時、校友会本部委員長）が、同じ応用化学１２班（当時）の仲間の数人（初代ＯＢ会長の松井さん、田中さん、杉原さん、瀧呑さん等）に声をかけ、更に当時アメフト部のマネージャーだった５期生の荒木宏さんをマネージャーとして迎え入れ、部員勧誘を進める一方、わずかな人数でとりあえずグラウンドに出て、監督及びコーチと一緒に、まさにデモンストレーション的に練習をやったそうです。そういう風景を珍しそうに眺めに来る学生（小生もその一人でした）に声をかけて勧誘し、少しずつ部員も集まり、総勢３０名足らずで産声を上げました。

このようにしてようやく船出したものの、最初は「部」ではなく、「同好会」でした。「部」と「同好会」では、予算面をはじめ、いろいろな面で雲泥の差があり、「部」への昇格が悲願であり学校当局や校友会本部へ日参したものでした。また、試合の結果も散々で惨めなものでしたが、部員一同の熱心かつまじめな活動が認められ、「仮部」を経て、正式に「部」に昇格したのは、昭和３６年の終わりか３７年頃だったと思います。

それと同時にリーグ戦における成績も、勝ったり引き分けたりの試合が次第に多くなり、遂に昭和３７年秋のリーグで２部優勝、入替戦にも勝って念願の１部昇格を果たし、連盟関係者はもとより他大学からも大変な驚きと賞賛の声が上がりました。後日、監督、キャプテン及び小生３人で槇学校長に報告に行きましたが、学校長は喜びとお祝いの言葉を述べられた後に、「大変なことになりましたね。防大の運動部は、半ばセミプロである一流大学に伍して活動するのは至難の技であり、またそういう所を期待している訳でもなく、２部の中位ぐらいが一番良い所でしょうね。」と防大校友会活動の目的と目標について話をされました。苦しい練習の後に掴む勝利の味は何物にも代え難いものであることは言うまでもありませんが、それにも増して、クラブ活動から得られる奥深い意義があることを教えて下さったのだと思います。

以来６０年、幾何かの浮き沈みを経ながらも、部員全員並びに関係者の真摯な努力により防大ホッケー部は着実な成果を挙げ、揺るぎない地位を築いてまいりました。特に卒業後、ＯＢの部隊における活躍には目を見張るものがあります。これも偏に防大４年間のクラブ活動において培ったもろもろの資質の賜であろうと誠に喜ばしく思う次第です。

最後に、長年にわたり直接、間接的に後輩の指導に積極的かつ熱意をもって取り組んで下さった多くのＯＢ諸氏の努力に対し、心から感謝と敬意を表します。

これらからも、ますますホッケー部が発展しますよう、そして、学生、ＯＢ皆様の御健勝と御多幸を祈って筆を擱きます。駄文悪しからずお許し下さい。

その時、どう思い・どうしたのか

第４代会長　第１３期生　関　芳雄

１　はじめに

このたび、防大ホッケー部創設６０周年を迎えるに当たり、心からお祝いと感謝を申し上げるとともに、皆様と共に慶びを享受したいと思います。

又、福井５代現会長はじめ、役員及び事務局の皆様には大変お世話になりまして、この紙面をお借りして、厚くお礼を申し上げます。尚、残念ながら、６０周年を迎えることなく、無念にもご逝去された初代会長４期松井先輩、及び３代会長８期落合先輩のご冥福を謹んでお祈り申し上げます。

さて私が防大ホッケー部に入部して、早５０年余という半世紀を過ぎましたが、私自身がホッケー部及び小原台ホッケークラブ OB・OG 会に関係・関与した「その時、どう思い・どうしたのか」を辿ってみたいと思います。

２　学生時代の４年間、まさにホッケーファストの日々。４年次に主将拝命

当初は陸上部に入部予定でしたが、１２期野本先輩の激しくも優しい勧誘と本質的には個人競技よりもチームプレーが好きであったために、ホッケー部に入部した。その時の１０期政権は、２部であり「東大に勝利」することが合言葉でした。そして１１期政権～１２期政権と受け継がれ、この間東大に勝利すると共に２部優勝そして１部へ昇格された。そして遂に１３期政権になり、４年の私が主将を命じられ、副将森村、主務池田を核心に、同期（佐藤、下間、中野、古賀、河野、故高橋、故長）の面々及び後輩の１４期森君・河野君・豊島君等の皆さんに支えられ、１部上位を目指し、テクニックの不足を補うために、「スピード・スタミナ・スピリット」（３S）を合言葉に、７期原田先輩・山口先輩の両コーチの厳しい指導の下、早い時間からグランドに出て、夕方暗くなればボールに石灰をまぶしてドリブル・タックル等の練習、そして休日は休みなしで、雨が降れば、教室教場でミィーテイング・練習・長距離走の明け暮れでした。即ち、「練習を２～３倍やれば、１部上位の大学にも伍して勝負できる。そのためには学生生活で活用できる時間は全て練習に注ぐ」ことこそが「その時の思いであり」、「上記のやり方」を実行させて頂いた。その成果が、春の関東リーグ１部優勝を飾ることができた。まさに創部１０年目の快挙であり、「防大旋風吹き荒れる」というスポーツ新聞にも大々的に掲載された。この１部優勝の偉業は、今日に至るまでの５０年間、後にも先にもなく、嬉しいやら、悲しいやら複雑な境地でもある。しかし、秋のリーグにおいては、残念ながら得点差は少ないものの最下位となり、入れ替え戦では、立教大と延長戦に次ぐ延長戦で最後に勝利して、１部残留という成績で、１３期政権は幕を閉じた。この１年間は、順風と逆風の体験であり、このことは、その後の自衛隊生活に大きな糧を得たと確信している。

３　防大勤務とコーチ・監督時代は、「母校とホッケー部への恩返し」の日々

昭和５８年～６１年のホッケー部の「コーチ及び監督」を拝命した２年半は、訓練係長の職務遂行とホッケー指導の両立であった。当時、７期原田先輩が監督されており、私は CGS 卒業後の勤務希望は「是非、体力気力が充実している今、防大勤務で監督をしたい」

という熱望が見事に叶い、当初は、原田監督の下で、コーチとして、同期の古賀君と共に指導陣の一人として、本来の仕事と同等以上に熱意を持って学生指導にあたった。事後、監督として、「１部上位」を目指して、学生時代からの思いである「３Ｓの成就」を掲げ、学生との戦い方のミーティングや指導に明け暮れた。結果的には、当時の学生たちは必死に頑張ってくれたが、１部上位は果たせず、中下位を維持し続けた。その間、防慶定期戦の活発化、グランド整備、体育指導員Ｃ級コーチ獲得、神奈川ホッケー協会の再構築、ホッケーグランド人工芝への検討等、色々な面で勉強させてもらった。この間、故木村部長や中溝部長には、学生指導を含め、公私にわたり、大変お世話になり、心底から感謝で一杯です。

防大における訓練係長という職務（訓練部業務・予算関係、自衛官の人事等）を最大限活用しつつ、校友会活動の在り方について、持論を展開普及してきたが、時代の流れなのか、防大の３本柱（勉学、学生舎生活、校友会活動）が崩れかけてきたことに危機感（特に校友会活動）を禁じ得なかった。

４　小原台ホッケークラブ（OB・OG 会）において第４代会長に就任

平成２１年～２５年の４年間は、ホッケー部 OB として「会員相互の親睦と融和団結及び母校ホッケー部への支援激励」を第一義に、１５期山崎副会長、１６期池田相談役はじめ事務局の皆様の絶大な協力・支援を頂き、毎月の定例会議、防大指導部との定例会、新入部員歓迎会、防大４年生送別会、定例総会、防慶定期戦、合宿支援、試合応援等、処々において、一歩でも半歩でも、OB・OG 会が心の拠り所・バックボーンとしての機会を活用して頂くために、積極的に開催又は参加させて貰った。この間、大野部長、北島部長、宮田部長には大変お世話を頂いた。学生時代の思い出を何度も再現して貰い、会長というよりも自分の新たな青春を具現した時代でもあった。

５　最後に

ホッケーと共に歩んだ５０年以上の年月は、私にとって、拠り所であり、宝そのものでした。そして、今現在の心境は、以下の通りであり、どうか『歴史と伝統を未来に繋ぐ』役割をそれぞれが担っていきましょう！！

①　これから余生は、「関心を示すも、関与せず」をモットーに、余命ある限り且つ自分で動ける限りは、余分な口を挟まず、「防大ホッケー部への PC メールでの時折の応援メッセージ」と「小原台ホッケークラブへの支援金（年会費とは異なる）を払い続けること」に徹していきたい。

②　防大ホッケー部の学生には、「少しでも高みを望み、強くなって欲しい。」
そのためには、「一人一人の努力・精進しかない。」そして「悔し涙を陰で思い切り流し、嬉し涙を面前で大いに流し、人生の機微を会得し、卒業後の指導者形成の肥料にして欲しい。」

防衛大学校フィールドホッケー部創設６０周年に寄せて

第２７期生　佐藤　正久

防衛大学校フィールドホッケー部の創設６０周年、おめでとうございます。

今でもクリアに頭に浮かぶコーチの非情な一言、「５０周！」頭の中を筋肉にして、ひたすらグランドを５０周走りました。そして基本・基礎を徹底する為に、腰を落としてスティック全体をグランドに這わせて走る通称「ひこじる」、膝だけでなく脚全体が笑いパンパンになってもリターンの繰り返し、涙がちょちょぎれました。更には決して諦めない粘り、時にはFW含め「専守防衛」に徹しながらもカウンターで勝利を決める。常勝天理大学との一戦では、延長後のペナルティーストローク（PS）合戦、最後の１０人目で勝利を呼び寄せた際は、決して諦めない防衛大の面目躍如で、観客からも感動をありがとうとも言われました。まさにホッケーで培ったそれら一つ一つが、私の貴重な財産であり、国会議員として邁進する毎日は、ホッケーによって培われた精神力と体力によって支えられていることを痛感させられます。

先ずは体力。これは、私の貴重な財産です。一昨年の８月から外務副大臣を仰せつかっており、中東、北米・南米、アフリカ地域を担当しています。就任から現在までに５５カ国を訪問し、実際にこの目で多種多様な文化を確認して参りました。時にはアフリカに０泊３日の出張等同行している若い秘書官が悲鳴を上げるほどの日程でも、私が辛うじてこなせるのは、青年期にホッケーに没頭し、体を徹底的に鍛えたからに他なりません。自衛隊の指揮官や幕僚も同じで、疲弊してしまっては良い仕事はできません。

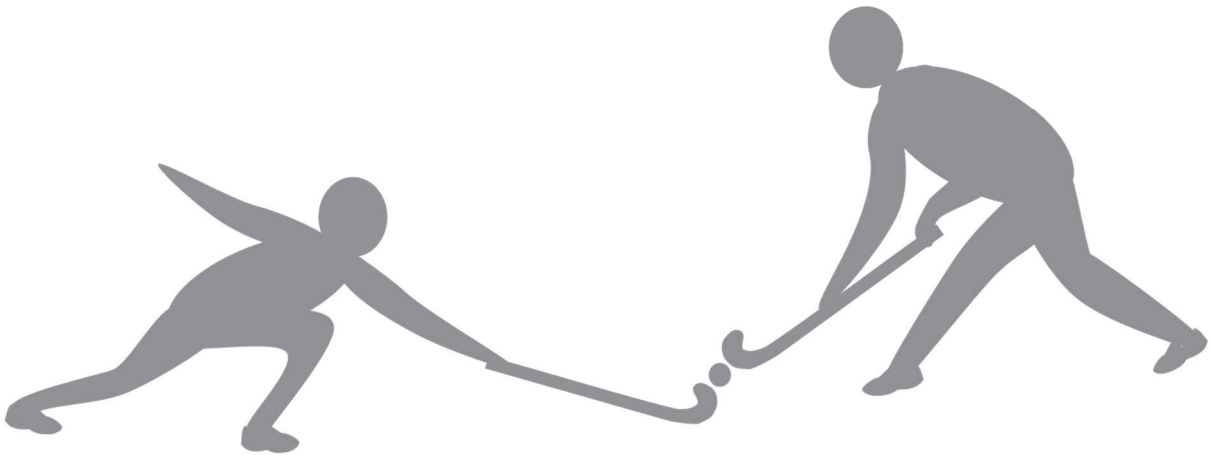
次に、判断力と粘りです。目まぐるしく変化するわが国を取り巻く安全保障環境、そして外交は内政の延長線上にあると言われるように、各国が自国の利益を追求する国際政治の中で、日本の国益や国民の安全を守り抜く為には、流れを読む判断力と嫌らしいぐらいの粘りが大事です。途中で諦め、怒って席を立ってしまったら負けです。小原台のグランドは、特にイレギュラーバウンドが多く、時には予測不可能なボールの動きに合わせたり、それを予測して動いたり等人工芝のグランドとはかなり違った環境下で鍛えられました。また、他大学に比し技術力が劣る防大は、守りを固めながら敵陣に空いたスペースを作り、またそれを見つけて、ボールを放り込み、そこへ走り込み、数的優位を作りシュートを決める、これを執拗に繰り返されることを他大学は嫌がっていたようです。

最後に、最も重要なのが仲間との連携です。これは、どの業界でも共通だと思いますが、１人でできる仕事には限度があります。正に、チームスポーツでのホッケーで身につけた感覚です。支援して下さっている方々や、同僚そして時には外国人とも呼吸を合わせて、しっかりとポジションを取り、わが国の将来のために今後もプレーを続けます。

なぜ、私がここまでフィールドホッケーに夢中になれたのか。それは、良い先輩や後輩に加え、フィールドホッケー部の組織文化があったからだと思います。私のチームメイトは、私を含め、全員が防衛大学校に入ってからホッケーを始めた初心者の集まりでした。関東学生一部リーグで勝利し、残留する為には、団結して練習するしかありません。当時は血気盛りな頃だから、ゲームプレーとか華やかなことをやりたい気持ちもありましたが、それを我慢しストッ

プ＆ヒット、タックルの練習に時間を注ぎました。明治大学の小林総監督にも指導を仰ぎ、基本・基礎の重要性を改めて認識し実践した結果、運も味方し全日本学生ホッケー選手権（インカレ）で準優勝することができました。基本・基礎を重視し、皆で団結し、決して諦めずに強い意志を持ち続ける防大ホッケー部の組織文化の賜物だったと確信しています。これら経験が、私のその後の人生の糧となっています。

今後も腰を落としての１００ヤード往復の様な日々ですが、手を抜くことなく国家の為に尽力して参ります。そして、防衛大学校フィールドホッケー部の今後の活躍を心より祈念しています。



事務局員としての１０年間

前小原台ホッケークラブ事務局長　第３６期生　大野　真

防大ホッケー部創設６０周年を心よりお喜び申し上げます。私は平成１７年３月から６年間の陸幕勤務間と陸幕班長時代の１年半を小原台ホッケークラブ事務局員として、陸幕会計課長時に事務局長として２年間活動しました。事務局の活動は市ヶ谷に勤務する２・３佐が中心となり、防大支部と連携しながら仕事の合間に行っています。自分が担当の頃は先輩方が少し抜けられた時期でもあり、数人で名簿の更新、ＤＡＨＡの発簡、総会・祝賀会、昼食会等を計画・実施していました。その後、５０周年事業準備の促進のため、１～２カ月に１度のペースで、会長、副会長、相談役等の主要メンバーと事務局員との定例の会合が設定され、準備を推進することになりました。この定例会は、その後も継続され現在も主要な事業の決定機会となっており、故落合会長、関前会長、福井会長とその間の副会長や相談役の先輩方に熱いご指導を賜りました。

節目の５０周年は一大事業でした。記念式典・祝賀会の規模、招待者等の選定を５０周年に相応しいものに、記念品は検討の結果、皆が使える携帯ストラップに（当時はスマホはまだ未普及)、記念試合は会場確保が困難なことから実施しないなど、＃１６池田相談役の厳しい予算計画指導をいただきながら、各担当が業務多忙の中、何とか進めました。最も大変だったのは空幕班長の＃２８佐野さん、遠目塚さんのチームで作成された記念誌で、過去の資料を駿河台大などから集め、５０年間の防大の歴史・戦績がまとまりました。

５０周年を機に目指した人工芝グランド事業は達成できず、現在も働きかけを継続しています。また、防大ホッケー部の１部復帰を目指し、＃１２野本さんに部外コーチとして監督や学生の指導をして頂き、＃１５山崎さんが「防大ホッケー部の戦い方」を冊子としてまとめられ、防大指導部の強化を図りました（その後、女子は５５期、６３期が１部昇格を果たし、男子は５３期、６１期が入替戦に出場するも１部復帰は果たせず)。

５０周年以外にも、定例会において、事業計画の作成、規約の改正、会費納入施策や寄付金制度、学生支援金等検討し実行してまいりました。定例会は、部長指導のように厳しいときもありましたが､終了後の懇親会ではホッケーを主な肴に様々な歓談ができ､楽しい時間でした。また、監督・コーチの人事調整、会費納入の促進及び名簿の更新も事務局の困難かつ重要な役割です。

平成３０年４月現在、市ヶ谷勤務者は４９人であり、組織的に活動しています。６０周年事業も準備組織を編成し進めて参りました。小原台ホッケークラブは防大校友会の中で最も活動しているＯＢＯＧ会だと思います。防大ホッケー部の発展のためにも、先輩方が築いてこられたこの組織を未来に繋げてもらいたいと考えています。その未来に繋ぐ施策として、全国のＯＢＯＧに防大ホッケー部と小原台ホッケークラブの活動を周知するために、フェイスブック、＃２９期伊藤さんにお世話になり立ち上げたＤＡＨＡメール等を活用した情報発信を行っています。今後は利用者を更に増大し、会員相互の交流が活発になるように活用していただければと考えています。

次の目標はＯＢＯＧチームを再結成して、ホッケーを楽しむ受け皿を作ると共に、学生強化

を支援することです。ＯＢＯＧになってもホッケーを楽しめる環境を作り更にＯＢＯＧの活動を活発化するとともに、他大学同様に現役学生の強化にも繋がると思います。卒業したばかりのＯＢＯＧは全国に散らばりますが、若手ＯＢＯＧを中心にホッケーの活動が活発化されることを願っています。

事務局の活動を行いながら５０期以降１０数年間、学生の試合や練習を見てきました。女子は人数が揃えば、防大らしい走りとねばりで１部昇格を果たしてくれています。男子は現代的な戦い方で頑張っていますが、２部の上位チームとの実力差は大きいと認めざるを得ません。この１０数年で差が開いた感があります。環境とルールの変化により、伝統的な戦い方だけで勝てるチームを作ることは難しいと思います。しかしながら、この１０数年間試合を見て感じていることは、他大学と同じような戦い方をするよりも、同じ厳しい環境ながら１部で戦ってきたノウハウが詰まった防大の戦い方を徹底し土台を作ることが、現代においても防大が１部及び２部上位と互して戦える方法だということです。

３Ｓ（スピード、スタミナ、スピリッツ）において対戦チームを凌駕すること、すなわち、状況判断・リスタート・トラップからパス等のプレースピード、縦パス・カウンターによる縦に早い攻撃、スプリント（全力走）とリターンダッシュを全力で繰り返しても最後まで自信を持って走りきれる走力、低い姿勢でねばり強く何度も妨害する守備力、圧倒的に強い相手にも怯まず勝とうとする精神力と、素人の集団が約３年間で組織的に戦えるチームとなるために、ポジションごとの役割、動き方が明確であり、個人の技術を組織の連携で補う防大に適した戦術戦法を、各種制約がある中でも厳しい練習の質と量で身に付けるチーム作りは、個人技術は劣っても組織力をもって戦う防大ホッケーの根本であり、それは現代のルールでも通用する普遍的なことではないでしょうか。

自分の学生時代､日頃の練習や合宿に顔を出されるＯＢのご指導によって､ホッケーの本質、防大の伝統を教えて頂いたと思っています。今はありがたいことに、曹コーチに最新の技術と戦い方を教えてもらえています。今後は、指導部を中心とした全国のＯＢＯＧが試合や合宿などに顔を出し防大の伝統を現役学生に伝えつつ、その伝統を土台として曹コーチの最新の技術を融合することで、必ず１部で戦えるホッケー部の伝統は繋がっていくものと思います。防大校友会において関東１部リーグで戦える部の「歴史と伝統」を未来へ繋げていきましょう。

―寄稿―

一枚の写真

第１６期生　池田　廣春

記念誌の期別写真集の中にあるホッケー部第１６期生の集合写真は、他の期の集合写真とは明らかに異なっている。公式戦の防大ユニフォームを身にまとい、スティックを杖にして疲れ果てた様子で同期８人が写っている。心ここにあらずの状態で各人の顔に笑みはない。これは秋季関東学生ホッケー１部リーグの防大最終戦終了直後の表情を切り取ったものである。

最終戦の先日の練習終了後、監督から意外な指示が出た。最終戦は３学年であった第１７期生のレギュラーを外し、４学年の第１６期生主体のチーム編成で戦うと。関東学生ホッケー１部リーグにおいて、防大は第１６期生と第１７期生から選抜されたベストメンバーで戦い、春季リーグは２勝２敗１分、秋季リーグはこれまで２勝２敗の成績であり、最終戦で勝利し勝ち越して第１６期政権の有終の美を飾るべく闘志満々であった。

監督の一言に、胸の中がざわついたのは私一人ではなかったと思っている。当時のルールでは、試合中の選手交代は認められていなかった。勝負を捨てたのか。勝つために死にもの狂いで毎日練習してきたのではなかったのか。レギュラーメンバーとは何なのかと。同期８人はマネージャーから渡された公式戦ユニフォーム一式を胸に薄暗いグラウンドから黙して散っていった。

翌日の最終戦は、全員が持てる力を出し合い全力で戦った。走りに走りワンチャンスに賭けて攻撃し、味方をカバーし全員で必死にゴールポストを守った。しかしながら、試合終了のホイッスルが無情に鳴り響き、善戦むなしく最終戦に敗れた。

試合終了後、写真を撮ると言われて集合したが疲れ果ててぼうっとしていた。にもかかわらず、頭の中では４年間のホッケー生活の様々な場面が走馬灯のように駆け巡っていた。

思えば良く練習したものだ。毎日毎日、日が暮れるまで中身の濃い練習が続いた。土曜日も日曜日も、雨の日も風の日も、試験期間中も練習の休みはなかった。ヒット、プッシュの基礎練習から始まりポジション別練習、そして練習試合。その後恒例の駆け足が始まる。１学年の時足の遅い私は、風呂か食事かの選択を迫られた時が多々あった。当番に遅れ何十回も腕立てをさせられた。それでもハードな練習に耐えて努力し続けると、体力は増し技術が向上していくことに少なからず驚いた。個人個々の技術は劣ってもオリンピック候補選手がいる１部リーグの他の大学と互角に戦えることを知った。ホッケー競技はチームプレーであると強く思った。

ホッケーに熱中しホッケーを中心とした防大生活であったが、一つの事にすべてをささげて打ち込める環境は、私の人生において防大４年間以外には訪れなかった。その後の自衛官人生における大事なものは、すべてホッケーから、ホッケー部の先輩、同期、後輩から学んだ。だからこそ防大４年間のホッケー生活が青春の１ページとして輝いて見える。ホッケー部第１６期生の集合写真を見るたびに、あの時代の様々な事柄が次から次へと、鮮やかに思い出される。

あれから半世紀が過ぎた。４年間苦楽を共にした同期８人が出場して公式戦を戦う機会があって本当によかったと古希を迎えた今にして思う。あの時、同期各人の胸に去来するものは何だったのかと、今あの写真を見て想うことは何なのかと、機会があれば問うてみたいと思っている。

第１６期生

「防大ホッケー部の特色・武器は走力」
－三沢高校ホッケー部との繋がり－

第２５期生　上田　知元

昭和 56 年に卒業後、部隊勤務中はホッケーに関与する機会は少なかったが、平成４年に中隊指導官として防大に勤務して以来、現在までホッケー部の活動に関わらせてもらっている。

特に、女子ホッケー部の新設・関東学生リーグへの参加・１部昇格に携われたことは大きな思い出であるが、私にとって、防大ホッケー部との繋がりと同じくらい貴重なものに「青森県三沢高校ホッケー部」との繋がりがある。

そもそも防大ホッケー部と三沢高校ホッケー部の交流は、11 期の遠竹ＯＢが始められたものである。昭和 46 年三沢基地勤務の遠竹２等空尉が高校横の道路を通った際、ホッケーをやっている高校生を見て、たまらず制服のまま職員室に飛び込み「ご覧の通りの自衛隊員ですがホッケー部長にお会いしたい」と申し込まれたのである。ホッケー部部長の三浦先生が対応、遠竹ＯＢの経験を聞かれ、その場で「４年後にみちのく国体があるが、私はホッケー経験がないのでコーチをやって頂けませんか」と依頼され活動が始まった。

遠竹ＯＢは、高校コーチ、高校ＯＢチームの選手、さらには三沢市体育協会役員として活動、大きな功績を残され三沢から異動された。これ以降、三沢基地に勤務するホッケー部ＯＢ・ＯＧは、時間を作っては、三沢高校グランドで汗を流してきた。防大チームとしても 17 期、25 期、27 期、38 期の夏合宿を実施している。防大が夏合宿を行った時には、土のグランドであったが、本年度中には人工芝グランドに作り替えられると聞いている。

私は、三沢基地に３度、計６年勤務したが、その度に三沢高校グランドに足を運び、ホッケーを楽しませてもらった。三沢には、私が学生時代、関東リーグで戦った法政大学、明治大学ホッケー部のメンバーがいる。彼らは、三沢高校から関東の大学に進学・卒業し、三沢市役所に勤務しているのである。プレーの後にはもちろん、飲むことになり、お互いの大学のホッケーの話で盛り上がるのだが、ある明治大学のメンバーが防大の特色・強さについて、話したことを紹介する。

「防大と戦うのは本当に嫌だった、試合で勝っても先輩からは「防大に走り負けているじゃないか、体力で負けているよ」と叱責されました。黙って聞いていたけど、内心は「防大に走り勝てる訳ないだろう、先輩たちだって負けていたでしょう」と思っていた。防大 27 期がインカレ準決勝で天理大に勝った試合は強烈でした。天理がドリブルやパスで抜いても抜いても次々に防大の選手が出てくる、防大の選手が 15 人くらいいるのではないかと思うくらいバックアップが早い。あのバックアップを可能にできる防大の走力は本当に凄かった。天理に勝てたのは防大の走力が大きな勝因だと確信しています。確かにテクニックも大切です、だけど、防大はテクニックでは１部のチームに勝てません、防大の武器、特色はテクニックの差を補う「走力」だと今でも確信しています。「走力」で絶対に負けないことを土台にテクニックを磨くべきです。是非、防大の現役選手に伝えて１部に復帰してください。」

現在、関東学生リーグは、人工芝での公式戦、２部にもホッケー経験者が多数在籍する等、防大にとって環境は厳しくなるばかりであるが、勝利に「走力」が不可欠なことには誰もが納得するであろう。戦術、テクニックを支える、他のチームに絶対に負けない「走力」の重要性を再認識し、１部で活躍する防大ホッケー部に成長してもらいたい。

防大ホッケーの伝統の継承と不易流行

第３５期生　武田　敏裕

防衛大学ホッケー部創設６０周年心よりお祝い申し上げます。５０周年記念行事がつい先日のように思い出されますが、あれから１０年が経ちました。時間の過行く速さに驚きながらも、この間も防大ホッケー部に携わった多くの皆様のご尽力に感謝と敬意を表します。５０周年のときに、陸幕勤務で事務局に席をおいていたことから記念行事に携わらせていただきました。今回、６０周年という記念すべき時に、記念誌への投稿の機会をいただきましたので、学生当時の防大ホッケー部の一時代を代表して紹介させていただきます。５０周年記念誌には、それぞれの世代を振り返った「防大ホッケー部５０年の歴史」が編纂されております。日本ホッケーの歴史から始まり、第１章の「草創期」、第２章の「関東学生ホッケーリーグ１部定着期」、そして第３章に我々が学生時代を過ごした「波乱期」が記されています。第４章が「現代ホッケーへの転換期」と区分されており、５０年という長い歴史を振り返ると、我々が日々、全力で戦っていた時代は、「波乱期」という時代でした。第３０期生まで、関東学生１部リーグで優勝１回、全日本学生選手権準優勝２回という輝かしい戦績を修めた過去２０年の歴史を引き継いで、第３１期生からの１０年間が「波乱期」ということになります。第３１期生は、手倉森さん、竹本さんと全日本強化選手に選抜される実力者がおられたにもかかわらず、不幸なトラブルから２部に転落し、それ以降、１部と２部を行ったり来たりと苦しい時代を過ごします。第３２期生が４学年の年、昭和６２年に第３５期生として防大に入校し、私の場合は、高校時代からのホッケー経験者でしたから、何の迷いもなくホッケー部に入部しました。当時は、木村部長（故人となられました。ご冥福をお祈りいたします。）、中溝副部長、大野先生に支えていただき、指導陣には、監督に２１期の河村さん、コーチで２３期出口さん、２４期上田さん、２７期加減さんがおられました。研究科学生で、２８期蒲生さん、２９期伊藤さんが在籍され、日々我々のために胸を貸していただきました。第３２期は、主将が立川、仙波、後藤、桜田という少ない４学年を中心に、下級生を混成しながら戦いましたが、この時代、主戦場となるグランドは、慶応志木や、東大駒場、早稲田東伏見など、防大とほぼ同じ条件で戦うことが出来る時代でもあり、平素の防大グランドでの練習が、そのまま結果として現れる時代でもありました。先輩ＯＢ皆様にも根気強くご指導いただき、「走り勝つホッケー」、「縦パス、ライト展開」の「伝統」は受け継がれ、結果として東大に負けて、２部４位でしたが、可能性を感じる時代でした。第３３期の石橋主将の時代、少しずつ、組織的な戦い方がチームとして浸透するようになり、「もう少しの差」をどう埋めるかが課題でありました。結果は、春季・秋季リーグ共に、２部３位、１部入替戦まで、「あと少しの差」が埋められない歯がゆい時代が続きます。第３４期の鈴木主将の時代、２部に転落して３年目になりますが、このまま２部の常連校として低迷するのか、再び１部に復帰するのか、大きな分かれ目の年でもありました。春季リーグでは、低い姿勢で粘り強く守る鈴木、舟橋、篠田ら、防御陣の活躍もあり念願の２部優勝、入替戦でも一橋を破り、３年ぶりの１部復帰を果たしました。秋季リーグでも学習院に勝って、１勝６敗７位で一部残留。この頃のグランド環境は、法政多摩では、人工芝化されており、１部での試合は、ほぼ人工芝での戦いが中心、東農大や法政とは大差で完敗しましたが、早稲田や明治などから得点が出来、また、東大、慶応、学習院とはほぼ互角に戦いました。「１部でどう戦うか」、これには、意見が分かれ、人工芝でのパス回しを取り入れるか、防大の伝統である、「縦パス、ライト展開」を追及するか、迷いもあった時代でした。第３５期は主将武田で、攻撃陣に青山、３６期中薗、３７期牧、防御陣に村田、廣谷、３６期大野、３７期ＧＫ小林を中心に、「１部でどう戦うか」をテーマに厳しい練習を重ねました。「走り勝つホッケー」、「縦パス、ライト展開」を中心としながらも、セットプレー、ショートコーナーのサインプレー、ライト展開からのフォーメーションなどにも時間を割き、１部中堅チームとは、互角に戦いたいと目標を定め、チーム作りに取組み、春季リーグでは、東農大、法政には、大きく差をつけられる展開でしたが、明治（０－４）、早稲田（３－４）、慶応（０－０）、学習院（０－１）、東大（０－５）とは、やや劣勢、若しくは、ほぼ互角の試合運びが出来、６敗１分け、１部８位、入替戦で一橋に勝ち１部残留、続く、秋季リーグでは、引き続き、東農大、法政には大差がつきますが、早大（０－６）、明治（０－４）にはやや劣勢、慶応（０－１）、学習院（０－０）、東大（３－１）とはほぼ互角で、１勝５敗１分けで１部７位の戦績を残しましたが、残念ながら立教に敗れ、３期で２部に転落する結果となりました。

最後になりますが、「不易流行」という言葉があります。長い防大ホッケー部６０年にも、「伝統の継承」の

一方で、時代の要請で、何を変えていくべきか、それぞれの時代に生きる学生が、日々迷い、「不易流行」が取組むべき課題である点では、今も昔も同じだと思います。「人工芝の整備無くして防大ホッケー部の将来はない」とおっしゃられたＯＢがおられましたが、私も同感です。陸幕幕僚時代に、東京オリンピック・パラリンピック招致をトリガーに、内局に対して、防大に人工芝をと働きかけ、福井小原台クラブ会長にもご尽力いただき、あと一歩のところまでいきましたが、残念ながら実現しませんでした。引き続き、学生のために汗をかいていこうと思います。現役の学生の皆さんには、「伝統の継承」、「不易流行」に夢と希望をもって取組んでいただきたいと思います。これまで防大ホッケー部を支えてこられました多くの先輩、関係者のご功績に心から感謝を申し上げます。そして、これからも防大ホッケー部は輝かしい伝統を継承していくものと信じております。

フィールドホッケー部の総監督

第４２期生　末本　紀彦

防衛大学校フィールドホッケー部が６０周年を迎える節目の年に総監督として勤務させて頂けることを光栄に思うとともに、その重責に身の引き締まる思いです。また、大隊指導教官としても将来の幹部自衛官育成に、日々思い悩みながらの勤務状況です。

校友会活動は防大の３本柱において、学科・訓練教育及び学生舎生活と相まって、人材育成に資するものです。校友会の目的は『体力・気力の増進、学生相互の親睦等』であり、その意義は『敢闘精神、チームワークの発揚等』となっています。フィールドホッケー部の活動は真に校友会の目的と意義を達成するものと確信しています。

私が卒業した約２０年前と比較して、防衛大学校は校友会活動時間における学校行事（月例パレード、講話や競技会等）増加に伴い、練習時間に制限があるように感じますし、また、ホッケーの公式試合会場は全て人工芝化され、ルールも技術も大きく変化しています。

着任時に学生の現場指導にあたる各監督・コーチを集め、『人材育成の視点を保持し基本・基礎を重視』して指導する旨を示しました。その内容は、諸先輩から常々教わっているホッケーの本質的事項である、【基本的チームプレーは右攻撃と早期からの執拗な防御（プレス）、基礎的個人プレーは低い姿勢のトラップ・パス・タックルとその実行を可能とする体力・脚力の保持】です。この基本・基礎の修得を通じて学生は資質・識能を向上して、チーム目標の達成や部員間の絆の深化が図られるものであると思います。先日、英国空軍創立１００周年記念ツアーの一環として英国空軍ホッケーチームが来校し親善試合を実施した際、英国代表を擁する彼らの組織的戦い方や個人技術は忠実にホッケーの本質を確行し、基本・基礎の重要性を深く認識させられた次第です。現状では、私がまだまだ未熟なため、徹底は不十分です。

着任直後の夏合宿中、男子部の一部には感情的になりスティックを地面に放り投げる学生が存在し指導陣により躾指導をする様な状況でした。しかし、学生の基本・基礎に対する理解は少しずつ浸透し、人間的な成長も図られつつあります。

練習のできる環境に感謝しつつ、私に残された期間もホッケーを通じた学生育成及び男女部の１部定着に微力ながら邁進する所存です。今後も、ＯＢ・ＯＧ皆様の変わらぬご支援、ご指導・ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

伝統の継承にあたり

第４３期生　向田　淳

６０周年という節目を迎えることができたこと、またご縁があり教える立場で小原台に赴任できたことに感謝申し上げます。

卒業して約１９年が経過した今、まさか私が指導官で戻ってくるとは思いませんでしたが、一番驚いているのは、私のいいかげんな学生時代を知る同期・先輩・後輩たちだと思います。

当時の活動を振り返ると、情熱あふれる先輩・指導陣に囲まれており、１５３０頃には下御領さん、樺山さん、手倉森さん、武田さん、大野さん、加藤さん、黒木さん、岸良さん・・・・指導部の誰かしらが、学生が出て来るのを今か今かとグランドで待っていたのを思い出します。何より守りに堅実で、基本基礎、特に基本である低い姿勢と守りにおけるノーミスに重点を置いている故、ＦＷも含めて全員で通称：「ひこじる」から練習をはじめ強靭な下半身を作っていました。また、クリアは全てプッシュ（振りかぶってヒットを打つ時間などないという理解から）でしたが、それゆえ「とてつもなく強いプッシュ」が求められていました。そしてそれらを象徴するような重戦車のようなＢＫの先輩がたくさん育成されておりました。攻撃は速攻を確実にものにするため、右サイドからの縦攻撃はチーム内で意思統一が徹底されており、それを成り立たせるために全員がスペースを作るため、スペースに走り込ませるために動いたり、スペースへのヒットボールには相手のマークを外してカットインしたり、一気に最前線に抜け出しセンタリング・タッチするＦＷ戦術が必然的に確立されていました。

ＦＷ・ＢＫのパート練習やフォーメーションが終了した後、最後は必ずリターンダッシュとランメニューを入れ、４００ｍトラック５５秒のインターバルや、４０分間ＬＳＤ走を実施していました。雨でグランドが使えない時は１０ｋｍ走や観音崎一周をするのですが、かかとをつかずにつま先と足首のスナップだけで走り切れるようになっていました。

当時やっていたことを整理するとたいそうなことをやっていたなと思うのですが、当時の指導部はそれでもまだまだ足りないと豪語しており、実際、諸先輩の練習量には遠く及ばなかったのではないかと思います。私の期は、４２期が秋に５年越しの１部昇格を成し遂げ、それを受け継いだ期でした。春・秋と１部残留しましたが、１部が８チームから６チームになる節目の時で、７・８位は自動的に２部降格する中、６位となり入替戦を経て残ったのはまさに奇跡だったと思います。

しかし、とどまるのは必然であったとも取れる要素があります。それは、「おそらくどのチームより走り込んでおり、走り負けないという絶対の自信があった」ことです。技も経験も及ばないのですが、「走力」で相手を出し抜く要素を持っていたのです。実際、ほとんどが守りの状況の中で何度抜かれてもしつこく戻って堅く守り、インターセプトからの速攻で一気にキーパーと１対１になり点を取る形がほとんどであったと記憶しています。

我々４３期は５人と少なかったのですが、戦術について４４期の知恵をも借りて試行錯誤しながら、おかげさまでなんとかやり切ったという印象です。３学年まではただがむしゃらに何も考えずにやっていた自分にはじめて芽生えた、個人のためではなく、組織のためという意識。終わった時に、やっと終わった、苦しかったがなんとか全うした、という気持ち。私が１・２学年の頃の４０・４１期政権も人数が少なく、我々同様に少数で防大ホッケー部４学年という重い看板を背負い、個人ではなく組織のために、私達を引っ張っていくための厳しい言動があったことを今更ながら思い出し感謝しています。

そして、練習のみならず試合でも聞き、相手チームも驚いていた原田精武総監督の言葉が、今となっては懐かしく思い出されます。「何て気持ちの入ってない練習（試合）やってるんだ！！！相手の足の一本や二本、折ってくるような気概がなければ通用しないんだよ！！！」

そんな私が今、防大で主に女子部にホッケーを教えながら思うところをお話ししたいと思います。現指導態勢は、部長以下、男女ともに非常に充実しております。そのような中、私は現役当時を思い出すと同時に、ＯＢ・ＯＧの代表・代弁者という看板を背負って、彼女らにその思いをぶつけ、日々厳しい言葉で啖呵を切っています。

ちょうど私の時代には、公式戦が全て人工芝になったと記憶していますが、人工芝になっても防大の戦術・

スタイルは、今も昔も変わらないと思います。もちろん、男女の区別なく、です。私なりの表現をすると、防大の戦術は、堅い守りが主軸であり、攻めは速攻を主体とし少ないパスの本数で一挙に前線につなぎ、走り勝ち、最後はゴール前の波状攻撃で押し込む、いわゆるラン＆ガンです。そして、根源にあるスタイルはこれまた昔から変わらない３Ｓ（スピード・スタミナ・スピリッツ）であり、これが防大の戦術を支えていると思います。

私が１学年の当時、防大女子１期（４０期）の皆様が４学年で活躍しており、たった数年で１部に昇格したと聞き驚愕したのを覚えています。たしかにまるで怪力男のようなプッシュやヒットを打つ恐ろしい（?）方々ばかりでしたので、当然といえば当然なのですが、、、、、。ここで言いたいのは、当時の４学年も男女ともに上記戦術・スタイルを体現するような練習をし、それを遺憾なく発揮していたということです。男勝りの彼女らは、男子と同じ練習をし、まさに男女の区別なくこの伝統を受け継いでいるわけです。

現役の女子部を見ていても感じます。当時の男勝りの１期生の血が累々と受け継がれているのを。具体的には、誰が教えるでもなく気力・体力で勝らなければならないという自覚があります。つまり、根性と基礎体力という防大生特有の長所を伸ばし、ここに勝てる要素を求めなければならないことを知っています。そして、戦術（ベクトル）をチーム内でより詳細に徹底することにより、組織力をもってノーミスの堅い守りや自分達にしかできないスピード感ある展開を体現しようとしています。加えて、女子部監督就任直後の２９年秋、今や学生日本一は当然、社会人を含めても日本一になろうかという山梨学院大学、それに準ずる実力を有する東京農業大学とリーグ戦を戦い、大量点を取られながらも心折れることなく、あきらめずに自分たちのホッケーを貫いた彼女らの勇姿を、そして結果、私の現役時代と同じ１部６位を達成してみせた、まぎれもない防大ホッケーの姿を見ています。

私の役割は、伝統の継承にあたり、そんな誇らしい後輩を導き、その背中を後押しすることです。残念ながら、３０年春リーグでは２部降格となりました。私が勝ち方を教えてあげなかったのが原因です。負けたのは負けるに足る必然の要素があり、チームに個人に足りなかったものがあるからだと素直に認めることから始まると思います。

彼女らには１部のチームに相応しい、素直で、そして愚直になれる真っ直ぐな心があります。防大ホッケー部の伝統を体現し、必ずや１部へ力強く復帰することを誓います。また、今後も皆様の変わらぬご支援、ご声援を賜りますようお願い申し上げ、結びといたします。

ホッケーを通じて

第４８期生　　佐藤　夏樹

このたび、防衛大学校フィールドホッケー部の創設６０周記を迎えられたことに、心よりお喜び申し上げます。記念紙の発刊に際し、寄稿する機会を頂きましたので４年間のホッケーを通じて感じたこと述べたいと思います。

ホッケーに入部したのは、当時、４年生部屋長（４５期中島さん）と２年生対番（４７期藤田さん）がホッケー部であったからにつきますが、４年間を通じて、監督を始め、諸先輩の方々、同期・後輩に恵まれ、練習は厳しかった半面、アットホームな雰囲気の下、体力的・精神的に成長することができましたこと、誠に感謝申し上げます。また、現在の仕事においても多くの先輩・同期・後輩に助けられており、この繋がりは大切なものだと思っております。４８期は、４名（手塚洋光（主将）、山内勉（副主将）、阿部博史、本人）と少ないですが、主将・副主将は、ホッケー経験者で、入部当初から先輩方と混じって練習する姿は、初心者の自分にとって、スター的な存在でした。４年間を通じて思うことは、楽しかったことばかりですが、２人に依存しすぎていた４年間でもあったと反省しております。

ちょっと話は変わりますが、今、巷では２０１８ワールドカップで盛り上がっております。第１次リーグ予選において、日本は、ＦＩＦＡランキング１６位のコロンビアに、見事勝利しました。日本だけでなく海外のメディアも取り上げるほどの快挙でした。そのゴールを奪ったのは、スター選手である香川選手と大迫選手の

活躍によるもので、２－１での勝利でした。これに対し、トルシエ元日本代表監督は、スター選手の活躍よりも、「チームが一つになれたことが勝因だ」ということを強く語っておられました。

私のホッケー４年目、頼れる４７期先輩方が卒業し、少数の４８期の代となったリーグ戦において、さらに、主将もいないという試合を経験しました。主要な選手のスキル・能力に頼りきっていた分、追い込まれたような気分になったことを覚えております。任せっぱなしで自分自身に自覚や役割意識が不足していたことの表れだと認識しています。チームだから一人ぐらい意識が低くても試合をすることはできます。しかし、「チームが一つになる」というのは、スター選手だけでなく、１１人のそれぞれが、個々にあった役割を認識し、歯車のように機能することであり、それぞれが役割を果たすことが重要なのだと当時、私が強く感じたことでした。こうした経験は、今の仕事にも活かされていると思っております。

最後に、チームの繋がりを大切にして、今後益々、ご活躍されることを祈念しております。

ホッケー部創設６０周年に寄せて

第４８期生　渡辺　智江（旧姓：川野輪）

１　はじめに

ホッケー部創設６０周年誠におめでとうございます。このような機会に立ち会えることができて、本当に嬉しく思っております。

卒業から早１５年が経過していることに、改めて時の流れの早さを実感しています。その中でも、業務の合間に読むＤＨＡＡ通信等は懐かしさを思い起こさせてくれるものであり、これを読んでくださる方に少しでもそう思っていただける一助になれば幸いです。１５年以上も前の話でありますが、徒然なるままに当時の思いを書いていきたいと思います。

２　当時

（１）入部の動機

私が入部した動機は２つあります。

一つ目は、部屋長が 45 期ホッケー部の町元さんだったことと、当時の４大隊にはホッケー部がたくさんいて（４大隊ホッケー部女子は、４年生２人、３年生１人、２年生２人でした。）、仲が良くて、楽しそうだなあという印象を持ったことです。

二つ目は、中学・高校と個人競技であるソフトテニスをやっておりましたので、大学では、団体競技をやって、団体生活に慣れ、今後の自衛隊生活に役立てば・・という漠然とした思いからでした。

（２）校友会活動

そんな理由で始めた私ですが、諸先輩方も仰っているように、政権獲得時には、部員獲得と校友会運営（隊務運営？）には非常に苦労した覚えがあります。４８期は端的に言うと、部員獲得に奔走、風評被害に対応した期だったと思います。

限られた練習時間の中で、一生懸命やればやるほど、「ホッケー部は練習時間が多くてキツイ、校外合宿をやるのでお金がかかる、土日の拘束時間が長い。」といった風評被害の中で、他の部の助っ人に助けられながらの校友会運営でした。

出口監督と野村監督による「スピード・スタミナ・スピリッツ」の３Ｓをもとに、勝つためにはどうしたらいいかを常に模索していたと思います。ただし、常に勝ちを追求しながらの練習だけですと、前述の通り、風評被害が広がり、入部部員が獲得できないという状況に陥りますので、その吻合を図りつつ、厳しくも楽しい校友会を目指しておりました。

残念ながら、我々の期では、「楽しい」部分を追求し過ぎたためか、素晴らしい成績は残せませんでしたが、そこで培った人間関係や他人への思いやり、様々な状況を乗り越えて物事を成し遂げるという精神力は今の自衛官生活でも非常に役立っており、改めてホッケー部に感謝する次第であります。現に、ホッケー部で出会った諸先輩方や同期とは今でも連絡を取らせていただいており、私の人生の心の支えでもあ

ります。
今、ホッケー部の活動をされている学生の皆さんは、実感が湧きにくいかもしれないですが、これは将来必ずかけがえのない財産になりますので、このご縁を大切にしていただけたらと思います。

3　最後に

とりとめのない話を書いてきましたが、改めてこれからの防大ホッケー部のますますのご活躍を祈念して、お祝いの言葉とさせていただきます。

後輩の皆さんの引き続きのご活躍を遠いところからではありますが、強く祈念しております。

「現代ホッケー」の中で勝ち抜くためには

第５２期生　久木田　知也

1　はじめに

ホッケー部創設６０周年誠におめでとうございます。このような機会に執筆させていただきまして大変嬉しく思います。私のような若輩者に高尚なことは書けません。しかし、「現代ホッケー」の監督を経験した数少ないＯＢとして、私の経験や意見が少しでも今後の防大ホッケー部のためになればと思い、書かせていただきます。

2　「現代ホッケー」の特徴

(1)　概要

ホッケーのルールが年々変化してきているのは、皆様承知のことだと思います。ここで結論として述べたいのは、防大ホッケー部が１部で戦い抜くのは、近年非常に難しくなってきているということです。

以下、少しばかり説明させていただきます。

(2)　ルール及び環境面の変化

オフサイドが廃止され、公式戦の会場が人口芝化されたのは、最近の話ではありませんが、現在は２部チームでも人工芝を保有もしくは練習の主会場にしているチームがほとんどです。

人工芝でのホッケーは、ボールスピードが速く、縦パスのみならず、アウトレット（ディフェンス間のボール回し）から相手を崩し、パスワークを攻撃の主体とするチームが２部でも多く見られるようになりました。また、ＰＣは昔のようなヒットシュートはほとんどなく、強烈なフリック（プッシュで浮かせるシュート）で得点する場面が増えています。強豪相手にＰＣをとられたら、ほぼ一度もブロックできる機会もなく失点してしまいます。

さらに相手の２３ｍライン内でのセットプレーでは、直接サークル内へ打ち込むことが禁止になりました。昔のロングコーナーやサークルトップのセットプレーから、強いヒットでゴールへ打ち込んで、強引にタッチシュートのようなことができなくなりました。しっかりとパスをつなぐことが相手陣内でも求められます。

つまりここで言いたいのは、「弱者の奇跡」が過去に比して起こりにくくなっていると言うことです。

(3)　対戦相手の変化

ア　男子

４０期後半から山梨学院の台頭が始まり、５０期代に駿河台大学が参戦しました。圧倒的な経験者を有するこの２校が存在することから、現在は、慶応や早稲田が２部との入替戦の【常連】になってきています。

また２部チームを含めて有能な指導者を採用しており、前述の人工芝での練習環境も相まって２部チームのレベルが５０期代と比較して格段に上がっております。

また、「戦術的に」選手交代をするチームが増加しました。選手交代が自由（何度も同じ選手が出入り可能）であるのは、皆様ご存知だと思います。２部チームでも特に上位の東大&一橋は多くの部員を有し、システマチックに選手を入れ替え、チームとしての走力を落とさずに戦います。１部のチームでは

さらにその傾向があります。

近年の防大男子の低迷は、走力やプレーの質が低下したのではなく、他大学のレベルや戦術が向上したと考えるのが妥当です。今や１人の選手が走る距離をもって「走り勝つ」は死語です。

イ　女子

新規参入チームはありません。しかしながら、経験者数や練習環境の違い等から１部上位（山梨学院、駿河台、東京農業、早稲田＆慶応）と、それ以下の実力差が大きく開いています。

６２期政権において１部６位という成績を収めましたが、これは現状の環境面から考えて極めて素晴らしいものであると考えられます。（これ以上は、現段階では厳しい・・・。）

３　「現代ホッケー」で勝つためには（私見）

(1)　【戦える】部員数の増加　（勧誘強化と休日返上のチーム力底上げ）

前述したように、他チームが選手交代をシステマチックに行う中、防大としてもプレーの質を大幅に落とさず、かつ戦術理解のある選手を多く育成することが必要です。

特に女子は、部員が少なく厳しい面はありますが、１部上位と戦う上で部員数は乗り越えなければならない壁だと思います。

男子は、部員は多くいますが、【戦える】となると物足りない。（チーム力底上げのための）練習試合を休日返上で多く行い、レギュラーメンバーの試合の中にもきちんと控え選手を混ぜて、じっくりと育成することが必要でしょう。（１軍は１軍、２軍は２軍ではなく、１軍に２軍を混ぜる試合を多く行って、戦術理解を促進。１軍は休日返上になるだろうが・・・）

(2)　【常時現場指導できる】指導部の増加

曹コーチ３名（男子部２名、女子部１名）の参加により、指導体制は充実してきてはいるものの、まだ足りないというのが、監督を勤めた際の私の所見です。男子部は部員が多いので１軍及び２軍で各２名（計４名）は必要でしょう。女子部は現場指導できる指導者が３名（ＦＷ、ＤＦ、ＧＫ等）必要だと思います。曹コーチだけで補填できない場合は、やはりスキルと指導力のある若手幹部が必要だと思います。他チームは最低これくらいの指導体制ですし、ＯＢ・ＯＧの練習支援も厚いので、ここを改善しないと、学生だけに結果を求めるのは酷でしょう。

(3)　人口芝での練習機会の増加　（学生の金銭的負担の軽減）

全ＯＢが実施可能なのは、やはり金銭的支援でしょう。ＯＢ会費は重要です。

現状として、人口芝での合宿は、ものすごくお金がかかります。金銭的事情から合宿を校内にしている時もあります。可能なら３連休以上の休みは全て人口芝での練習や試合にすべきです。試合会場は人口芝ですから人工芝慣れは重要です。

４　おわりに

校友会は、防大の３本柱の１つであります。その経験を将来の幹部自衛官としての資質・識能の向上につなげなければなりません。ホッケー部も当然例外ではありません。

自ら考えさせ、組織を運営させ、責任をとらせる。これらは幹部自衛官にとって必ず必要となりますが、校友会以外にはこの経験を満足にできません。そのため監督等指導部は、学生の模範たるプレーや言動で学生を感化・善導し、学生を「その気」にさせ、全力（学生が思う全力ではなく、指導部が思う全力）でホッケーに取り組ませることが必要です。そして「その気」がズレた方向へいかないように、適時適切に指導して、「勝利」という単純な目標に向かって、その過程を充実させる。学生の発意で厳しい練習を行わせることが重要です。

私は監督時代、私の指導力不足もあり、学生は中々思ったように成長してくれませんが、成長が感じられた時は、自分のことのように嬉しかったです。こんなにやりがいのある仕事はありません。現役学生も求めていますので、若手幹部は是非防大勤務を希望し、学生指導に当たって欲しいと思います。私自身、ホッケー部監督で学生指導した経験は、現職の普通科中隊長勤務にも反映できており、現在も非常に充実した勤務をおくれています。

最後に、現役学生へ。環境面の改善を主に書きましたが、学生は環境面を言い訳にすることは許されません。勝つためには他チームより努力するしかないのです。後悔のないように全力で取り組んで下さい。応援しています。

創設６０周年に寄せて

第５５期生　大久保　亜李沙（旧姓：小野）

この度、防大フィールドホッケー部が創設以来６０周年を迎えられ、記念誌を刊行されますことを心からお慶び申し上げます。また、女子チーム発足以来、２０数年以上にわたり歴史と伝統が脈々と引き継がれ、更に昨年は１部６位という大活躍をしており、ＯＧとして大変喜ばしく感じております。この度、寄稿文を書かせていただく機会を頂きましたので、自身の現役時代の経験と後輩に伝えたいことを綴らせていただきます。

私達５５期が入部するまでは、しばらく深刻な人数不足が続き、他部員から支援をもらいながら試合に参加しており、周囲からの厳しい声があるほどに存続の危機に直面していたと聞いております。部員数が１１名に到達し本格的な練習ができるようになると、その年の秋リーグに２部昇格を果たしました。その後の５３期政権で堀内監督（当時）の下、防大ホッケー部の伝統的な戦い方である「スピード、スタミナ、スピリット」が女子チームに浸透し戦い方が確立されると、その年で一気に２部３位に躍進しました。当時も補欠がいないという人数不足の問題は常に抱えており、７０分を走りきる体力と闘志は必然的に身についていきましたが、学年が上がるほど下級生のカバーができるだけのより高いスピード･スタミナ･スピリッツが必要となりました。併せて、防大は入部したばかりの１年生も試合に出場させるため、３、４年生が主体となる他大学との技術差を補う必要がありますが、経験者並みに個人の技術力を向上するのは難しいと考え、そのポジションや学年毎の役割に求められる技を磨き、チームとして総合的に技術力を上げることに努め、その結果、５５期政権は春リーグで２部完全勝利、１部昇格を収めることができました。

１部での戦いとなる秋リーグでは、経験者が多数いる強豪校たちに勝利することの難しさを痛感することになりますが、圧倒的な技術差があるチームに対して、防大らしく、そして誇らしい戦いができた一戦を紹介します。それは、絶対王者・山梨学院大学との戦いです。前方でボールを奪うアグレッシブな防大本来の戦い方に対して、守備の重心を下げて、カウンターによる少ないチャンスで得点を狙うスタイルで挑みました。１部に昇格したばかりの防大に対して大量得点をあげることが山梨学院の選手に課せられていたかもしれませんが、相手の流れを作らせない根気強いクリアや、防大の連携したタックルによってドリブルやシュートを何度も阻止しました。カウンターによる反撃のチャンスをものにすることはできず、結果として０－７となりましたが、「失点を１０点未満におさえる」目標が達成され、更に山梨学院の選手が試合後に悔し泣きしており、黒星なのに勝利したような達成感が得られるとともに防大の存在を示すことができた一戦となりました。秋リーグ終盤では、１部７位（１勝）となって金野監督（当時）と歓喜をあげて一緒に嬉し涙を流し、最後の入替戦で負けて悔しい思いに浸ることになりましたが、やり果たしたという様々な思いや、感謝の気持ちを共感しながら同期で肩を組んで泣いたことを忘れません。今でも当時の指導部や応援に来て下さったＯＢ・ＯＧの方々からのご指導・ご鞭撻や、仲間と過ごした時間はとてもかけがえのない思い出で、今の私の原動力となっています。

戦い方の一例のアドバイスは回想話から読み取ってもらえれば幸いですが、学生一人一人が高いポテンシャルを有する防大ホッケー部の強さは、部員数の確保と個々がチームの中での役割を自覚することに始まり、高い組織力にあります。各人の役職やポジションで、何をすべきか、何を目標に練習に励めばいいのか、上級生は考えれば自ずと分かります。精一杯の努力は、かけがえのない経験と人との絆として必ず返ってきます。上級生は下級生にしっかりと目標を示し、率先垂範して一人の人間、プレーヤーとして大きく成長していくことを心から応援しています。

今後益々の学生の活躍と防大フィールドホッケー部の発展を祈念しています。

創設６０周年に寄せて

第５６期生　小野　俊輔

防衛大学校フィールドホッケー部創設６０周年、心からお祝い申し上げます。防大１学年の頃に５０周年を迎えたと記憶していますので、この１０年間の時間の過ぎる早さに驚きを隠せません。一方、この１０年間の最初の４年間はホッケー部で様々なことを学び、残りの６年間はホッケー部で培った経験や知識を活かして部隊で勤務して参りました。誠に僭越ではありますが、この場を借りて、卒業して６年経過したＯＢとして部への思いを当時のことを振り返りながら申し述べるとともに、現役の後輩の皆さんに対して応援の言葉を送らせて頂きたいと思います。

【５３期政権時代～１学年～】

フィールドホッケーというスポーツに初めて出会い、そのスポーツに情熱を注がれている諸先輩方の姿を見て入部を決意したことを今でも覚えています。学生生活が辛い時も、勉強が行き詰った時も、校友会だけが自分の心を解放する空間でした。５３期政権には、秋リーグでの１部との入替戦で戦う姿を見せていただき、この時に一部昇格が自分の中で明確な目標になったことを鮮明に覚えています。

【５４期・５５期政権時代～２・３学年～】

４学年になった時に自分の政権はどのようにするかを常に考えながら、練習に励んでいました。５４期の方には本当に鍛えて頂きました。５５期の方が少なかったこともあり、我々５６期は５５期政権の時には、ほぼ全員がレギュラーとして試合に出させていただきました。しかし、まさかの春リーグで３部に降格し、非常に責任を感じたことを覚えています。１部の常連だったＯＢの方々に見せる顔がないと思ったと同時に、ホッケー部の歴史の重みというものを改めて痛感したことを覚えています。

【５６期政権時代～４学年～】

春での２部昇格のプレッシャーを相当感じたことを覚えています。３部のチームもそれぞれ歴史と伝統を背負っており、真剣勝負が数試合続きました。入替戦は延長戦でも決着がつかず、ＰＳで勝利し２部昇格を決めました。２部に昇格しただけでと思われる方も多いとは思いますが、勝ったことが分かった瞬間に喜びの涙がこぼれ出たのは後にも先にもこの試合だけでした。

秋リーグの目標は１学年からの夢であり、先輩方の思いを受け継いだ１部昇格であったことは言うまでもありません。しかし、秋リーグになって一番考えたことは後輩育成だったかもしれません。先輩方のように後輩のために何かできているか、自分達が卒業しても後輩達はやっていけるのか等をよく考えていました。

結果として２部４位で秋リーグは終了し、目標を果たすことはできませんでした。敗れた瞬間に本当に本当に悔しかったことを覚えていますが、引退してからはホッケーというスポーツを通じて本当に多くのものを得たと今でも思っています。

【現役の後輩の皆さんへ】

私は、去年（平成２９年）の慶應との定期戦に参加し、５年ぶりに真面目にホッケーをし、現役チームの試合も観戦しました。今のホッケー部は、指導体制も変わり、ホッケー自体のルールも変わっているため、当時と状況は異なっています。しかし、歴代の先輩方がそれぞれの後輩達に託してきた思いというものは脈々と伝わってきているものと思っています。私も５３期～５５期の先輩方の思いを５７期以下へと伝えたつもりでいます。そのような思いが積み重なったものが「伝統」であり、「不易流行」という言葉の「不易」にあたる部分だと思っています。この「不易」を忘れずに新たな変化を重ねて、現役の皆さんの「防大ホッケー部」を創り上げていってください。５６期の若輩者が先輩風を吹かせて偉そうなことを述べましたが、現役の皆さんの活躍を聞くのを心より楽しみにしています。

最後になりましたが、歴史ある防衛大学校ホッケー部の今後益々の発展を祈念するとともに、日頃よりご支援頂いている小原台事務局に御礼申し上げます。

私にとっての防大フィールドホッケー部

第５７期生　宗形　勇希

１　はじめに

防衛大学校フィールドホッケー部創設６０周年誠におめでとうございます。私は防大５７期の宗形勇希と申します。まず、創設６０周年という大きな節目に、寄稿文の特別投稿という機会を下さった、小原台ホッケークラブ事務局長大野様をはじめとする方々に感謝申し上げます。まだまだ若輩の身ではありますが、防大フィールドホッケー部が、いかに私の人生において大きな存在であるかを含めまして、活動を通じた思い出を述べたいと思います。

２　現役時代の思い出

１学年の時は、とにかく走っていた記憶が一番残っています。当時の防大フィールドホッケー部は、技術では到底他大学に勝つことはできなかったため、体力（走り）でカバーしなければいけないという状況でした。その頃から負けず嫌いだった私は、先輩（特に５６期）にも負けたくないという気持ちがあり、走ることだけは誰にも負けないという気持ちで一生懸命でした。そのおかげで、現在も走ることに関しては大得意です。また当時の４学年（５４期）の方のプレーや人間性を見て、このような人たちになりたいという尊敬を抱いていたことは今でも覚えています。

２学年になり、当時の４学年（５５期）が少なかったこともあり、ＦＷとして試合に出場する機会が多くありました。同期と切磋琢磨することはもちろんですが、先輩と張り合おうと躍起になっていたこと、そして主将（５５期中田さん）に文句を言い過ぎて試合に出させてもらえなかったことがありました。この年、男子は３部に降格してしまいました。

３学年になると、本格的にＦＷとして活躍するようになりました。同時に、自分のプレー、人間関係、自分の人間性等で一番悩んだ時期でもあったように思います。様々な場面で、４学年（５６期）そしてＯＢの方々には、大変お世話になりました。春季リーグでの劇的な勝利により、２部に昇格した時の感動と喜びは、絶対に忘れることのできない思い出です。

４学年（５６期）引退後の春季休暇合宿において、私は学生時代最大の失敗をしました。詳細は省かせていただきますが、それにより、５７期政権は実質的に崩壊し、同期や後輩、今までの伝統を築いてくださった先輩方に多大な迷惑をかけました。今でも申し訳ないと思っています。特に当時の主将とはそれまで切磋琢磨して一緒に頑張ってきた仲だったのですが、それ以降関係が希薄になってしまいました。

本当に申し訳ありません。その後、私は活動を自粛し、同期が一生懸命という一言では片付けられないほどの苦労をし、５７期政権の建て直しをしてくれました。そして夏季休暇の合宿から活動を再開させていただけるようになり、再スタートをきらせていただきました。これだけ周囲の人に苦労をかけたにも関わらず、学生最後の試合の時、私は応援席に座っていました。ここも詳細は省かせていただきます。

３　おわりに

前述したとおり、学生時代の私は、とにかく我が強い人間で、自分が納得いかないことは、ＯＢ、上級生、同期であっても関係なく、とことん噛み付き、後輩に対しても良い意味でも悪い意味でも厳しかったと思います。しかし、当時の様々な経験が、人として大きく成長させてくれたと確信しています。防大フィールドホッケー部は私の人生の中で、人間として多くを学ぶことのできた大変貴重な故郷です。現在、その防大フィールドホッケー部に対し、何も恩返しができていない状況ですが、今後、小さなことから始めて行き、必ず恩返しすることをお誓い申し上げます。現役の皆様におかれましては、様々な困難や苦労があるかもしれませんが、全力で「今」を楽しんでください。全力で挑戦するからこそ、防大フィールドホッケー部で得られる物は無数に存在します。そして、人との繋がりを大切にしてください。防大フィールドホッケー部での出会いはその時だけではなく、将来もずっとかけがえのない存在になると思います。

防大ホッケー部創設６０周年に寄せて

第５８期生　駒野　成俊

創設６０周年、おめでとうございます。

この記念すべき節目に５８期生を代表し、記念誌へ寄稿させていただくこととなりました。この歴史ある防大ホッケー部の伝統を引き継いでいく後輩たちに、激励の言葉を伝えたいと思います。

長年目標に掲げている「１部昇格」はＯＢ、ＯＧをはじめ、監督、コーチ、今を戦う現役学生の共通の目標であり、達成することは容易ではない。防大ホッケー部は様々な制約がある中で、練習、試合をこなしていかなければならない。このような状況下の防大ホッケー部の戦い方について、自分なりの考えを述べていく。

防大ホッケー部の特質といえば、経験者がほとんどいない素人集団であること、グラウンドコンディション、各種行事、陸上競技との折衝等、練習環境が悪いということである。文句を言っても誰かが改善してくれるわけではないし、限られた条件下でベストを尽くすしかない。なかなか難しいことではあるが、私が在学中に実践したことも踏まえて、特に重要だと思うことを２点あげる。

１点目は、継承すべき伝統と変えるべきものを選別することである。防大の伝統といえば、やはり粘り強い守備、走力だと思う。やはり、素人集団であり、技量のないチームがテクニックに勝るチームに勝っていくためには、走って走って翻弄する、アグレッシブなプレーで圧力をかけるほかない。その点は、防大の長所であると思う。一方で、そこに固執するが故、ボールを使用して練習ができるのに、体力トレーニングに取り組むことはいかがなものかと感じる。当然、基礎体力がなければ防大の力の根源である走力は生まれないが、球技であること、練習環境に制限があることを踏まえれば、ボールを使った練習ができるときはそこに集中すべきである。一例を述べたが、防大の特質を踏まえ、変えていくべきものは勇気をもって変えていくべきだと思う。

２点目は、研究することである。素人集団とはいえ、やはり基本的な技術（プッシュ、スイープ、ヒット、ストップ等）は習得しなければならない。とはいえ、１部のチーム、２部の上位チームと戦っていくためには、状況を打開するスクープや、フリック等の技術も身に付けていかなければならない。素人集団である以上は、上手なチーム、選手の研究をすることが重要である。その第１歩が「真似」である。何事においても真似がスタートであり、それからいろいろなことを試してみて、自分なりのスタイルを築いていけばよい。また、技術のみならず、セットプレーなどの戦術に関しても同様である。対戦チーム、自チームをよく分析、研究し、自分たちができることは何なのか、得点するためにはどうしたらよいのか、勝つためにはどうしたらよいのかを考えていってほしい。

最後になるが、団体競技に必要なことは「チームワーク」である。チームワークを大切にして、これからも目標に向かって頑張ってもらいたい。

ホッケーを通じての現在

第５９期生　白簇　あず沙

創設６０周年、誠におめでとうございます。このような伝統ある防大ホッケー部の記念誌に今回寄稿させていただくことになり、光栄に思います。

さて、卒業から３年以上が経過した今でも、練習のこと、試合のこと、ホッケー部での日々を一瞬一瞬思い出すときがあります。当時に後悔が全く無いとは言い切れません。今思い出してみると、あのときはああしていればよかった、あれはしなければよかった、と考えることも多くあります。それでも当時の私たち５９期として過ぎて行った４年間が全てで、今更変わることはありません。ホッケー部に入部して、４年間先輩や同期、後輩と共にプレーしてきたからこそ現在があるのだと実感しています。

話は変わりますが、私自身は防大に入るまでフィールドホッケーというスポーツを見たことも聞いたこともあ

りませんでした。入部した動機も、部屋にホッケー部の上級生がいて勧誘を受けた、というありがちなものだったと記憶しています。１学年から２学年の練習は私にとっては厳しいものでした。そもそも陸上で走ることをそれまでスポーツとしてやってこなかったので、夏の暑さも手伝って倒れた日を昨日のことのように覚えています。また、私が小さい時から続けていたスポーツは、どれも時間を計測して戦うものでした。相手となる人が目の前にいて勝ち負けを決めるスポーツは、私にとってそれまでの何倍も闘争心に火がつくもので、ある程度練習にも慣れると更に更に強くなりたい、という気持ちが強くなりました。勝負に勝つことはとてもいいことです。それまでの自分たちのやり方が間違っていなかった、ということの１つの証明にもなります。ただ、勝負に負けることもとてもいいことです。チームの欠点と良い点が浮き彫りになり、次に繋げることができるからです。人並みのことではありますが、このことに本当に気が付くことができたのは、ホッケーのおかげだと思っています。何かに失敗して落ち込んでしまうときも、この経験があったからこそ持ち直して更に向上していくことができる精神力を身に着けることができました。

その精神力ですが、１人で維持するのは至難の業です。チームであれば、基本的にはチームメイトが支えあって維持し、時にはチームとは全く関係のない人に支えられることもあります。私にはチームメイトの先輩や後輩、そして同期が非常に支えとなっていました。特に同期との毎晩の話し合いでは、ぶつかることもありましたがそれらがあったからこそ、現在のかけがえのない同期としての関係があると思えます。つい先日、全員で一堂に会す機会があり、懐かしくも寂しくも感じられました。しかし、ＯＢ、ＯＧの方々が卒業後何年も関わりを持って過ごしている姿を見て、私たちもそのように時を過ごしていけるのだと確信することもできました。

人それぞれホッケーから得たものは沢山あり、その経験を経て現在があります。今後その経験をする現役選手達には、後悔なきようこれからの時間を大切に過ごして貰いたいです。最後に、今後さらに防大ホッケー部が大きく躍進されることを心よりお祈りしております。

ホッケーと出会って

第６０期生　木谷　将人

創設６０周年おめでとうございます。６０期男子を代表し、記念誌に寄稿するという貴重な機会を頂いたことに感謝します。この原稿を書くにあたり当時のことを振り返ってみたいと思います。

私がホッケーと出会ったのは、防衛大学校に入校してからでした。新しいスポーツに挑戦したいという思いと、他のどの校友会よりも目立つホッケー場で華麗にシュートを決めるかっこいい先輩達の姿に憧れ入部を決意しました。入部してみると、華麗なプレーとは裏腹に、厳しい夏の走り込みやタックル練習で階段の昇り降りが困難なほどの筋肉痛を初めて経験しました。防衛大学校の学生は、学生舎・校友会・勉学の３本柱の両立を目指しますが、１学年時は学生舎生活だけでなく校友会においても体力的にも厳しく、春から秋季リーグが始まるまでに、同期が５人も辞めてしまいました。きついから辞めたいと口に出し、易きに流れることは簡単なことですが、校友会の監督やコーチ、上級生達が親身になってホッケーについて教えてくださり、入部当初に比べて少なくなった同期と団結して練習に励むことが心の支えとなって厳しい練習にも耐え、体力的にも精神的にも強くなるきっかけにもなりました。また、学年が上がるにつれて勝ちにこだわるようになり、同期や後輩とも意見や考えがぶつかることもありましたが、これほど熱くなって取り組むことができたことは今となれば良い経験であったと感じます。

ここで私がホッケー部に入部して多くのことを学ばせてもらった中で、特に心に残っていることについて述べたいと思います。

一つ目は、学生のうちに組織運営に携わることができたということです。私は４学年時にＡチームに在籍しつつも、Ｂチームの教育・監督をする立場として６０期政権での役割を担っていました。自分のことだけでなく、後輩のことも考えなくてはならないため、広い視野で物事を考えることができるようになり、学生舎での教育にも参考とすることができました。特に、後輩が成長していく姿を他の同期よりも近い距離で見て感じ取ることができ、教育する立場の難しさと良さを学ぶことができたことは、自分の成長にも繋がったと思います。

二つ目は、ホッケーというスポーツを通して多くの人と交友関係を築くことができたことです。ホッケーの先輩や後輩、ＯＢ・ＯＧの方々と出会い、自分が未だに経験したことがない話を聞くことができ、様々な考え方を学び知見を広げることができました。また、渉外担当として、他の大学との試合調整をしていたこともあり、防衛大学校内だけではなく他の大学の友人にも恵まれ、数多くの練習試合をする機会を得ました。そしてプライベートでも遊ぶ機会があり、社会人チームに混ざり一緒にプレーして、共に汗を流すこともありました。この貴重な出会いを大事にするとともに、築き上げた交友関係をさらに深めることができたらと思っています。

これらの経験は、すべてホッケーと出会い、防衛大学校ホッケー部に在籍したからこそ学ぶことができたことです。私がホッケー部で学ぶことができた多くのことは、すべて諸先輩方が築き上げて下さった６０年という歴史や伝統があってこそだと思います。それは、日々全力でホッケーに励み、学生最後の青春を悔いが残らないように過ごしてほしいということです。それがいずれ自分にとって大きな財産に変わるとともに、これからのホッケー部の伝統を作っていくことにもなると思います。

今後の防衛大学校ホッケー部のさらなる発展とリーグ戦での益々のご活躍を心から願っています。

ホッケー部創設６０周年に寄せて

第６１期生　佐々木　誠

この度、防衛大学校フィールドホッケー部におかれましては、創設６０周年を迎えられますことに対し、心からお祝い申し上げます。若輩の私が６０周年の節目に筆を執らせて頂きますのは大変恐縮ではございますが、６０年という長い歴史を支えて下さった諸先輩方への感謝の思いと現役ホッケー部諸学生に対する激励とを、私の現役時代の経験を踏まえて述べさせて頂きます。

さて、私は平成２９年に防衛大学校を卒業し、幹部候補生学校への入校とその後の部隊勤務の傍ら、時間を見つけては防大ホッケー部の練習、合宿及び試合へ足を運びました。そこには、スティックを片手に休むことなくグラウンドを駆ける活力に満ちた学生と、それを厳しくも温かい目で見守る監督とコーチの姿があり、私が現役だった頃と何ら変わらない光景が広がっているのです。私がいくら歳を取り、幹部自衛官として波乱の人生を歩み始めても変わらない防大ホッケー部の姿は、私の原点として、また、青春の象徴として私の中に在り続け、心の支えとなってくれています。

ちょうど砂時計の落ちる砂が元に戻らないように、私たちも時間を戻して現役の頃には戻れません。だから、ＯＢとして現役の学生達と接すると、彼らがどこか遠い存在のように見え、少し寂しい、ノスタルジックな気持ちを抱かずにはいられないのですが、私の防大ホッケー部に対する愛着と帰属心は一層強くなっている気がします。それは、一心不乱にホッケーに打ち込む現役学生の姿が、当時の自分と重なり、防大ホッケー部に受け継がれている伝統を感じるとともに、自分もその伝統の一部を形成しているという誇りが生まれているからでしょう。

話が大きく逸れてしまいましたが、私がここで述べたかったことは、防大ホッケー部６０年の伝統は、私達の誇りであり、ＯＢと現役学生とを結びつけるものであるということです。それでは、防大ホッケー部に受け継がれていく伝統とはどのようなところに現れているのでしょうか。チームとしての戦術、プレースタイルは各期の政権により変容し、６０年間受け継がれている伝統的なものとは言えませんが、それでも、「よく走り、決して諦めない」ところは防大ホッケー部の伝統と言ってよいと思います。チームのために走る献身性、与えられたポジションでの任務を諦めずに遂行しようとする意志は、将来国防を担う防大学生達が養うべき資質であり、私が現役であった頃も、ＯＢの方々によく言われていました。幹部自衛官としての宿命を帯びた学生達は、ホッケーを通じてその資質を涵養し、幹部自衛官としての土台を築き上げていく。これもまた、防大ホッケー部の伝統であると思います。

私は現役の頃、この伝統をＯＢの方々から教わり実践したことで、人間的にも成長でき、また、チームの２部リーグ準優勝とインカレ出場を果たすことができました。この伝統を築き上げて下さった諸先輩方には、感謝の思いしかありません。

現役諸君も、この伝統を踏襲し、成長してほしいとＯＢとして願うばかりです。訓練や各種行事で制限される

練習時間や場所、新入部員の確保の難しさ等、他のライバルチームとは違った不利点が防大ホッケー部には存在しますが、それを乗り越え、献身性と諦めない意思を持った強いチームを作ってきたのが過去６０年のＯＢの方々です。６０期分のＯＢが、現役諸君が同じように成長してくれることを期待し、見守っています。

もし、チーム作りで悩むことがあれば、ＯＢの方々の話をきくなりして、６０年の伝統に触れてみて下さい。そこに成長のヒントがあるはずです。

創設６０周年に寄せて

第６２期生　出水　里奈

私たち６２期女子は「小さな存在」であった。６２期女子ホッケー部の人数も少なく、またそれぞれが発揮する力や能力もわずかであった。それはホッケーではだけではなく、運営面等の、ホッケーとは異なる分野でもそうだった。 下級生に劣るところもたくさんあった。しかしながら、６２期が運営したこの女子ホッケー部で「１部昇格」と史上初の「１部残留」という歴史的快挙を成し遂げた。それだけではない、私たちはこの大きな成果以外にも大切なことを得ることができた。それは、これまでに多くの困難に立ち向かい、努力をしてきたことで得られたのである。

６２期女子は３人で２年生の冬から運営をしてきた。右も左も分からず、どれが正しいのかも間違いなのかも分からなかった。けれども、一生懸命にがむしゃらにやることで、失敗はすることもあったけど、一歩ずつ防大女子ホッケー部を引っ張ってきたと思っている。力不足であったために、当時の下級生には混乱を招くようなことをしてしまい、不安にさせることもあった。さらに、同時に、運営だけではなく、ホッケーのプレーや技術面でも、十分な技量と経験もなかったため、６２期の３年時の関東学生ホッケーリーグは２部の下位で締めくくることになった。私たちは自分たちの無力さに落胆した。ホッケーが好きなのに、何も成果が出ずに、楽しくもなくなった。ホッケーでもどうすれば良いのか分からなくなってしまった。６２期の３年時の夏合宿、それが私たちのターニングポイントであった。当時の久木田監督（５２期陸自）がこれまでの女子部の考えをガラリと変えた。２年時までは夏合宿の日数が１週間であったが、久木田監督のご指導のもと、１０日間以上することになった。また、練習内容においても、基礎を固めるために、ドリブル練習やパス練習を徹底的にこなした。また体力を付けるために、ランニングメニューを今まで以上に導入した。一切、甘えや妥協は通用しなかった。当時の私は体力も技術もなく、夏合宿が苦痛でしかなかった。けれども、仲間を信じ、部員を鼓舞し、自分も全身全霊で挑んで、真っ向から「ホッケー」に向かい合い、成長ができた夏合宿になったと思う。それから、ホッケーに対する気持ちや意識が大きく変化した。ホッケーにおける技術や体力の向上にこれまでよりも積極的に取り組むようになった。さらに、運営の面でも、より良い練習のために練習や試合の準備を迅速に確実に行うようになった。

状況は良くなっていると思ったが、良いようにものごとは進まなかった。勝つことばかり考えるばかりでは、部員の中で意識の差が生じ、考え方も大きく異なってきた。部としての精神的な統一がなされてなかったのだ。ホッケーはチームスポーツなので、部員の士気が下がったり、部員を損失したりすると、チームが弱くなっていく。部員を鼓舞し、士気を高揚させて、それを維持させるのはとても難しい。どうすれば良いのか迷ったが、地道に意識の差を無くすように努めた。全員の意識を高く持たせて、一人も欠くことなく関東学生ホッケーリーグに出場し、目標の達成をすべくこの問題にも立ち向かった。個人の考え方を変えることは難しかったが、結果的にはチームとしての方向性を統一することはでき、チーム一丸となって試合に臨むことができた。

６２期女子ホッケー部は、６２期女子が４年時に、好成績を残し、防大女子ホッケー部の歴史に残るような大きな成果を挙げた。それは、私たち６２期女子が「小さな存在」だったからこそ努力をし、全員で勝ちに行こうという気持ちを持てたからだと思う。私個人として、ホッケーのある４年間を通じ、一人の防大生とし、一人のプレーヤーとし、さらに一人の人間として大きく成長したと思う。防大女子ホッケーで仲間と試合して、勝てて本当に良かったと思っている。

最後に、これまで多大なるご支援、ご指導をしてくださった指導陣の方々及び諸先輩方、心の支えとなってくれた家族や友人、そして厳しい練習に励み、苦楽をともにし、夢であった「１部昇格」と「１部残留」を一緒に

獲得した防衛大学校女子フィールドホッケー部に、この場をお借りして深く感謝を申し上げます。
私たち６２期女子一同は防衛大学校女子フィールドホッケー部のＯＧとして、熱烈なファンとしてい続けようと思います。

防大ホッケーのあるべき姿

第６３期生　園井　寧人

私たち男子ホッケー部は春季関東学生ホッケーリーグを終え、夏合宿に向けての準備期間に入っている。春季リーグの結果は目標であった「１部昇格」には到底及ばない結果となってしまった。この結果になり気づいたことが２つある。１つ目は今の学生は遠くの目標を前面に押し出しすぎると逆に結果が伴わないということである。まずは初戦、そして自分たちの所属しているプールで上位に入り、順位決定戦で１、２位に入る。そこで初めて入れ替え戦の切符を手にすることが出来、１部との試合で勝つ。この行程をもっと全部員が明確に意識し、遠い目標と目の前の目標の両方を認識する必要があった。２つ目は全員の勝つという意識、１点をとりに行く意識のベクトルを同じ方向に向けるということである。場面ごとでプレーヤーの力を入れるところはまちまちである。それのみをプレーで発揮してしまうとチーム力としてはマイナスになる。独りよがりのプレーのオンパレードどなるからだ。そのためにチーム戦術があり自分たちの利点、欠点を考慮し最大限のチームパフォーマンスを出せるものにしなければならない。これを踏まえ秋季関東学生ホッケーリーグでは目の前の結果にしっかりこだわり最終目標として私たち６３期が成し得たい目標を達成できるようにする。

現在男子ホッケーチームは４１人の部員が在籍している。学年ごとの人数は４学年１３名、３学年４名、２学年１１名、１学年１３名でもちろん全員初心者。「ホッケーなんて初めて聞きました、あるんですね」「え、氷の上でやるんじゃないんですか？」なんて質問が毎年毎年聞かれる。そんな未知のスポーツであるホッケーに自分の４年間を投じて一緒にホッケーをしてくれる学生を１人の部員として非常に嬉しく思うとともに、主将として身の引き締まる思いがする。私が入部したての時に比べ、部員間での学年の垣根を越えて切磋琢磨していると感じる。それが良い意味での上下関係が無いということに繋がり、チームの雰囲気を作為しているのだと思う。この雰囲気を作り上げることが出来たのは私たちが１学年の時の４学年である６０期から６１期、６２期と政権運営で培われたものであると考える。これを後輩たちである６４期に引き継ぎ今後もいい雰囲気で勝ちにこだわるチームを作っていく。そして伝統あるホッケー部の輝かしい１ページを作るのである。

他大学との練習試合などで相手の監督さんから「防大は初心者の集まりなのによくやっている。自分も学生の時リーグで防大の文字を見ると恐ろしかった。」というお言葉を頂いたことがある。その監督さんの現役時代は１５年ほど前であったが、今の防大ホッケーにその威厳はあるだろうか？自分たちのプールに防大の文字があるだけで恐れられる存在になっているだろうか？そうとは言えない。しかし、将来幹部自衛官になる者として、日本の国防の最前線に立つ存在としてそうでなければならない。一人ひとりの小さなプレーからでいい。それが結果としてチーム力に変わり、対外試合で強いチームとして認められる。防大ホッケーのあり方をよく考えながらより良いチームを作れるよう邁進していくつもりである。多々至らぬ点があると思いますが指導陣並びにＯＢの方々のご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い致します。

創設６０周年に寄せて

第６３期生　中畑　美紀

今年度４名の新入生が加わり、我々女子部は「ど根性ホッケー」「誰からも応援されるチームづくり」というスローガンのもとに１８名のメンバーで日々活動しています。プレー面に関しては、今までよりも根性を全面に出した負けん気の強いホッケーを目指し、服務面に関しては、規律の維持はもちろんのこと、部員全員がより高みを目指して切磋琢磨し、持ち前の元気で純粋にホッケーを楽しめる雰囲気を作っていこうという思いでこのスローガンを掲げました。部外の学生から見れば、ホッケー部は厳しい校友会だと思います。身体がボロボロになるまで走り、休日も返上して練習し、ときには仲間同士が本気でぶつかり合うこともあります。しかし、女子学生の人数が圧倒的に少ないこの学校において“女子部”として活動し、ホッケーというスポーツにこれほどまでに全力で打ち込むことが出来ているということを誇りに思っています。とはいえ、依然として女子部員の少なさに頭を抱えているのが現状であり、怪我人が発生すると思うように練習が出来なくなることや、激しいレギュラー争いが存在しないこと、モチベーションに個人差があることなど向き合うべき課題はたくさんあります。

私が１学年の時、当時の女子ホッケー部は私たち新入生を除くとレギュラーメンバー１１名すら揃わないという危機的な状況でした。そのような中でも、活気のある雰囲気に惹かれ、なにより１番熱心に勧誘されたということで、ホッケー部への入部を決意しました。１学年の時は見様見真似の手探り状態でホッケーをしていた私たち６３期８名は、２学年時は４学年がいなかったため、気づけばチームの主力となっていました。６２期主導の下、本気で「２部優勝」「１部昇格」を目指すも、春・秋ともに「２部下位」という結果に終わり、言葉にできないほど悔しかったのを覚えています。そして、私たち６３期が３学年の春、６２期の下でついに「２部優勝」「１部昇格」を達成し、秋には１部６位という結果を残し、防大女子ホッケー部史上初の「１部残留」を果たしました。

６２期の下で成し遂げた１部昇格及び残留という快挙から、我々６３期下のこのチームは更なる高みを目指してスタートしました。しかし、今年の春リーグでは、１部７位、そして２部降格という結果になり、６３期として掲げていた「関東学生春季・秋季リーグともに１部５位」「インカレ出場」「全日本大学ホッケー王座決定戦出場」という目標には手が届きませんでした。秋リーグからは２部で闘うことになります。この結果から私たちに足りなかったのは、やはり細かい基礎技術だと痛感しました。

勝って共に喜び、時には負ける悔しさを仲間と分かち合える、これがチームスポーツの最大の強みだと思います。それと同時に、チームメイト全員が同じベクトルを向かなければ勝ちは掴めないことが最大の難点でもあります。チームを引っ張る主将という立場にたった今、運営面では下級生に迷惑をかけることも多々ありますが、それでも笑顔でついてきてくれる大事なチームメイトとともに勝つ喜びを分かち合えるよう、６３期を主軸にチームを勝利に導きます。もちろん、新たな目標は「２部優勝」「１部昇格」です。今春の悔しさを胸に基礎を見つめ直し、この結果を次につながる財産へと変えられるよう、秋リーグではもう一度１部の舞台へ返り咲きます。

最後に、私たちが大好きなホッケーに全力で打ち込めるのは、ＯＢ・ＯＧを始め、防大内外の皆様からのご支援によるものだと思っております。感謝の気持ちを胸に日々努力してまいりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

競技規則等の変遷

現在のホッケーを観戦・指導またはプレーする際に役に立つという視点から筆者（＃44 渡邉）の主観、雑談を交えながら非常に「やわらかい感じ」で現在の試合の状況及びルール等について紹介する。

１　全般

①グラウンド

５０周年記念誌で「日本においてもグランドは人工芝に移行した。」と触れられていたが、現在、全ての公式戦が男女ともに人工芝で開催されていることから「日本においてもグランドは人工芝への移行を完了した。」と言ってもよい。一方、防大を含め、強豪チームと言われない大学は、未だクレーグランドであるという実情があり、これが人工芝特有の技術、戦術の習熟には影響がないとは言えず、戦力の乖離拡大、結果としての実績低迷からくる人工芝グランド化の実現性の低下につながる負のループになっているものと考えられる。他方、最近の防大は、各国軍隊との親善試合も実施される状況にあり、軍隊の根幹となる士官養成機関として国力を示すに恥じない施設も必要であり、『防大グランドの人工芝化』は切実なる要望である。

ただし、防大のグランドも平成２１年に改修され、筆者としては、「黒く石だらけの平らでないグランド」から「黄土色に緑色が混ざり、大きな石の存在を感じない平らな素晴らしいクレーグランド」になっていると感じているところ。ホッケーに必要な基本動作はクレーでも人工芝でも不変であり、学生には与えられた環境において、創意工夫し、誰にも負けない根性と体力をもって環境による技術力の乖離を埋めて貰いたいと思うし、それは全く不可能ではないと信じている。

②ヤード（yard）呼称の廃止

イギリス発祥のスポーツであり、ヤード（yard）の単位で距離を呼称していたが、現在はメートル（m）で呼称している。コートの大きさ、ライン位置は変わっていない（縦；サイドライン：100yd=91.4m、横；バックライン：60yd=55m）が、よく発声していた 25yd⇒23m、16yd⇒ビハインド or サークルトップと言わないと理解して貰えない。当然、5yd 離れろ！ではなく 5m 離れろ！という規則になっており、当該呼称でないと理解を得られない。筆者にとってはかなりの衝撃的な事項であったが、万国で用いられる汎用性の高い単位に見直すことにより、より分かり易い、とっつき易い規則にしたもの理解しています。

他方、スティックの標準長は１yd であり、スティックを用いてグランドのラインを引くという作業をしてきた筆者からすると、ホッケーはヤードが基準！は忘れて欲しくない事項と感じている。

③ハーフ制からクォータ制への移行

「３５分×２、休憩：５～１０分」のハーフ制であったが、現在は「１５分×４、休憩：２分、１０分、２分」のクォータ制が平成３０年度から適用された。「１ピリオドー２ピリオド」及び「３ピリオドー４ピリオド」の間の休憩は２分であり、休憩・作戦タイムではなく給水時間としての位置づけである。よって、２分経過後、準備の有無に関わらず再開される。

④選手交代

現在は、登録選手（16～18 名）内であれば、どのプレーヤーも何回でも無制限に交代することが可能である。かなり前から当該規定であったと認識しているが、昨今の試合は、当該規定が最大限活用された戦術となっている。体力が少しでも落ちたと判断したら直ぐに交代し常に動けるプレーヤーがグランドにいるという戦い方である。久々に観戦すると、前述のクォータ制と逐次入替わる選手で、誰がどのポジションで、試合中に何を改善すべきかの掌握に非常に戸惑う経験をするであろう。

ただ、本規定の運用拡大は、他校と比し時間が経過しても走り続ける絶対的な走力を伝統としてきた防大の利点縮減とも考えられ、また、経験からくる学年による技術差等、選手層が薄い防大（男女共に）の特性からすると、控え選手においても相応の技術力を有す強豪校と比し不利な流れにあることを認識し、勝つための防大の戦い方、身に着けるべき能力についても相応の検討、取組みが必要ではないかと考える。

２　細　部

５０周年時を基準に大きな規則変更はされていないが、規則の解釈、適用について主要な場面毎に記載

する。全般的な規則の運用方法として、試合の流れを止めることなくより得点が入る方向で運用され、プレーヤーだけでなく、観戦対象としても面白さ（魅力化）を高める傾向にあり、攻撃側、守備側ともに規則は平等であるものの、攻撃有利な運用となっていると感じている。

①セットプレー

・再プレーにおいて、プレー側は何度ボールに触れても問題ない。以前は、１ヤード動かさないとプレー側が触れられない等の規定があったが、現在はそのままドリブルすることも可能である。なお、再プレーするプレーヤーから他のプレーヤーが離れないといけない規定はあり、距離は5mである。

・かつて、『ロングコーナー』とは、守備側が自陣バックラインを越えるボールを処理（故意でない）した際の用語であったが、現在、そのような言葉は存在しなくなっている。所謂『ロングコーナー』は、改正を繰返し、「エンドラインのコーナーから攻撃側の再プレー」⇒「エンドライン上におけるコーナーから5yd位置からの攻撃側の再プレー」⇒「サイドライン上におけるコーナーから5yd位置からの攻撃側の再プレー」等々と変遷し、現在は『バックラインを切った地点の延長上の23mライン上からの攻撃側の再プレー』となる。『ロンコー、ロンコー！』と言わず『23m、23m！』が適切なのです。なお、故意に自陣バックラインを越える処理をした際は、問答無用に『ペナルティ・コーナー』を攻撃側に与えることとなる。

・攻撃側23m以内のエリアにおいて、ボールが5m以上動かされるか、守備側が触るまでは、サークル内にボールが入るようにプレーしてはならない。以前は、パスによるミスを回避すべく、サークルへの打込みを多用した記憶であるが、直接の打込みは禁止となっている。

・『ペナルティ・コーナー』は現在のホッケーにおいて、重要な得点チャンスである。攻撃側は、サークルの外にボールを一度出すことが得点の条件であり、（昔のように）サークルの外でボールを停止させる必要はない。なお、ボールがサークルから５m以上に移動した場合は、『ペナルティ・コーナー』の規則は適用されなくなる。また、守備側であるが、キーパーの他に４名を配置することは昔のままであるが、攻撃側の球出し前にフライングをした際は、プレーはやり直しとなるものの、反則者（所謂、一番機）はセンターラインの後ろに戻ることとなり、その代わりに他の者が守備に入ることはできず、守備人員が減っていく。逆に、攻撃側の球出し者がフェイント等で反則をした際は、反則者は同様にセンターラインの後ろに戻ることとなり、代わりの者が球出しをすることとなる。

②アップボール

危険行為等についても、より重要視されているものの、その基準（判定）はかつてと若干異なる。故意であるか否か、結果として危険を誘発しているか否かが重視され、コントロールされたプレーにおいては危険行為とならない場面が多々ある。

現在のホッケーにおいては、フリックやスクープによりボールを上げるプレーが多用される。大きく前進したいという局面に限らず、有効であればボールを上げる手法が用いられ、また、ドリブル中のタックルを通過させるための浮いたボール、パスをする際に相手スティックを越えるための浮いたボール等が多用される。かつてならば、危険球と判定されたボールは、各個人の技術の進展により現在は意図された危険ではないプレーと判定される。当然、5m以内に相手プレーヤーがいる場合は、危険行為と判定されるため、それら手法に対してはプレス、マークが有効ではある。また、上げられたボールに対しては、最初の受け手が優先となり 5m以内の距離に入ってはいけない。受け手は処理する際、ボールがコントロールできる状態であれば、肩より上の部分を含むどんな高さでのボールであっても、危険を誘発しない限りレシーブ等のプレーが可能である。

③スティックのエッジの使用

５０周年時からその使用の許容が記載されている。フォア側エッジを使用したヒットは禁止されているが、ボールを浮かせる目的のタッチ、プッシュ動作における使用は認められている。また、バックハンドで（逆サイド）のエッジの使用についても、危険でないことを前提に認められており、バックハンドによるエッジ使用は、シュートだけでなくパスにも用いられている。リバースヒットと言う事もあり、＃４０前半までのＯＢ・ＯＧは非常に驚くプレーである。

④シュートアウト（ＳＯ）

本規定は新たに規定されたプレーである。試合が引き分けで終了し勝者を決定する必要がある場合、『シュートアウト』戦を行い、勝者を決定する。攻撃をする５名のシューターと守備をする１名（ほとんどＧＫ）

を各チームが選出し１対１で実施する。ボールをゴールの中心から最も近い23mラインに置き、攻撃者からの攻撃により開始され、１回のシュートアウト時間は８秒間で決着する。かつては、『ペナルティー・ストローク』戦であったが、『シュートアウト』戦になった。どちらも緊張することに変わりはないが、『シュートアウト』の方が、技法を含めより個々の技術が必要であり、攻撃及び守備プレーヤーはより緊張する場面であり強靭な精神が必要である。

⑤アンパイア

「サジェスションアンパイア」、「ビデオアンパイア」という制度も規定に盛り込まれている。

・サジェスションアンパイア制度：ゴール付近のフィールド外にサジェスションアンパイアを配置し、アンパイアが判定に助言を求める制度

・ビデオアンパイア制度：試合中にリアルタイムでビデオリプレーをできる装置及びビデオアンパイアを配置し、アンパイアが判定に助言を求める制度

・チャレンジ権：各チームが、試合中にアンパイアに対し、サジェスションアンパイア、ビデオアンパイアに判定の再考を要求できる権利

他の競技に漏れることなく、アンパイアのあり方も変化をしている。これら制度は、大会規模、会場施設等を考慮した上で採用される日本独自の制度であり、オリンピックにおいて採用されるか否かも注目である。

３　その他（使用用具等）

〇スティック

・木製からグラスファイバー、そしてカーボンの採用（今は人工芝ありきです。）

・ヘッドは数種類のタイプが出現しリバースプレーがよりやり易い形状に進化（２５年前から逐次）

・今や、高いもので５万円を超すものまで・・・。

〇レガース（すねあて）

・サッカー用レガースから専用レガース

←　膝まで覆う安全性、もう何も怖くない！！

○シューズ

・普通の運動靴、サッカーのトレーニングシューズから今はホッケー専用シューズ

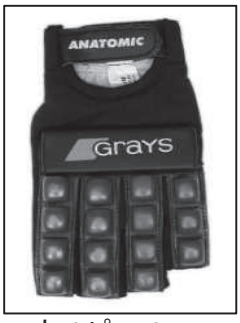
← 人工芝専用ですがあの『アシックス』が製造です！！

○フェイスガード

・ペナルティー・コーナーにおいては着用が推奨され、今やどのチームも装着

← これで、もう怖くないぞ！全て止められる！？

○グローブ



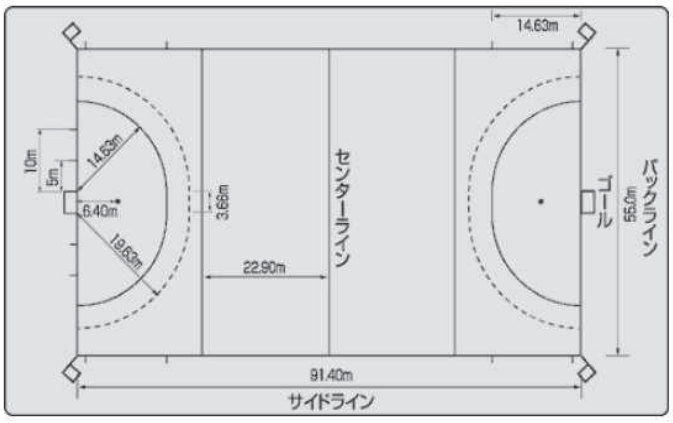
・基準内の大きさであれば、通常のプレーから装着は可能

← 低いタックルしても、早いボールも怖くない！！

○マウスピース

装着が推奨されている。

○フィールド



・メートル表示に変更（その他は変更なし）

← 走り回れ、防大ホッケー部！！！

※ ＯＢ／ＯＧの方も、
フィールドに足を運びましょう！！！！

期別写真集

第５３期男子

第５３期女子

第５４期男子

第５４期女子

第５５期男子

第５５期女子

第５６期男子

第５６期男子、女子

第５７期男子

第５７期女子

第５８期男子

第５８期女子

第５９期男子

第５９期女子

第６０期男子

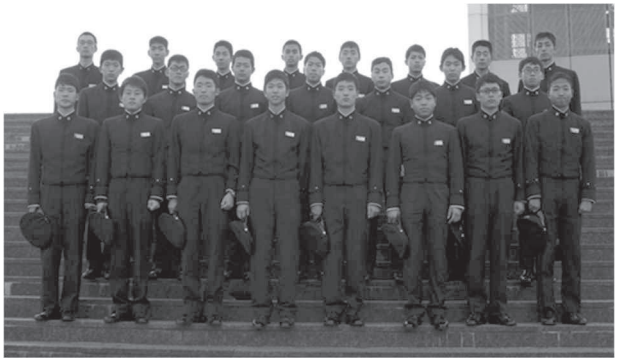
第６０期女子

第６１期男子

第６２期男子

第６２期女子

第６３期男子



第６３期女子

英国陸軍ホッケーチームとの親善試合（２８．９．１７）

記念品の交換

親善試合

防大において計３ゲーム実施し、スコアは、２－１、１－０、０－２と見事勝ち越す事ができた。

英国空軍ホッケーチームとの親善試合等（３０．６．９）

記念品の交換

レセプション

防大において男女共にゲームを実施し、女子１－３、男子１－７と奮戦惜しくも負け越した。
レセプションにおいては、日英選手・指導陣及び事務局員が参加、懇親を深めた。

慶応義塾大学との定期戦(３０．８．２６)

全体写真

記念品の交換（ＯＢ）

防大においてＯＢ・ＯＧ約２０名の参加を得て、定期戦及び懇親会が実施された。

戦績記録（５４期～６３期）

男子ホッケー部

第５４期（平成２１年度）

・春季関東学生ホッケーリーグ
２部Ｂプール
防大　４－１　東海大
防大　２－３　専修大
防大　１－２　成城大
防大　１－３　学習院大
３位－４位決定戦
防大　３－４　専修大
（４敗　２部４位）

・秋季関東学生ホッケーリーグ
２部Ａプール
防大　１－２　一橋大
防大　０－１　東海大
防大　２－１　武蔵大
防大　６－１　中央大
５－６位決定戦
防大　２－０　成城大
（２部５位）

第５５期（平成２２年度）

・春季関東学生ホッケーリーグ
２部Ａプール
防大　０－６　東大
防大　０－２　東海大
防大　０－２　中央大
防大　０－１　武蔵大
７位－８位決定戦
防大　１－４　成城大
（５敗　２部８位）
２部―３部入替戦
防大　１－５　木更津高専
（３部降格）
・東日本インカレ
２回戦 防大 ０－21 法政大
・秋季関東学生ホッケーリーグ
３部リーグ
防大　２－２　立教大
防大　２－１　筑波大
防大　３－０　横浜市立大
防大　６－０　東京農工大
１－２位決定戦
防大　０－２　立教大
（３部２位）

第５６期（平成２３年度）

・春季関東学生ホッケーリーグ
３部
防大　２－２　横浜市立大
防大　２－２　立教大
防大　２－３　筑波大
（２分１敗　３部１位）
２部－３部入替戦
防大　３－３　成城大
ＰＳ４－３
（２部昇格）
・東日本インカレ
１回戦 防大 0-10 早稲田大
・秋季関東学生ホッケーリーグ
２部Ａプール
防大　１－２　一橋大
防大　３－１　専修大
防大　２－０　東海大
防大　２－３　武蔵大
３－４位決定戦
防大　０－２　東京大
（２部４位）

第５７期（平成２４年度）

・春季関東学生ホッケーリーグ
２部Ａプール
防大　０－３　東海大
防大　２－１　成城大
防大　０－１　一橋大
防大　２－０　専修大
（２勝２敗　Ａプール３位）
防大　０－２　武蔵大
（２部６位）
・東日本インカレ
１回戦　防大 1-4 武蔵大
・秋季関東学生ホッケーリーグ
２部Ｂプール
防大　２－５　東海大
防大　１－３　中央大
防大　０－１　成城大
防大　１－２　武蔵大
（４敗　Ｂプール４位）
７－８位決定戦
防大　０－０　成城大
ＰＳ２－０
（２部７位）

第５８期（平成２５年度）

・春季関東学生ホッケーリーグ
２部Ａプール
防大　０－０　立教大
防大　１－１　一橋大
防大　１－１　中央大
防大　２－５　学習院大
（２勝１敗１分け Ｂプール２位）
３位－４位決定戦
防大　１－０　一橋大
（２部３位）
・秋季関東学生ホッケーリーグ
２部Ｂプール
防大　１－１　東海大
防大　１－１　立教大
防大　２－３　武蔵大
防大　２－１　成城大
（１勝２分け１敗 Ｂプール３位）
５－６位決定戦
防大　０－２　中央大
（２部６位）

第５９期（平成２６年度）

・春季関東学生ホッケーリーグ
２部Ｂプール
防大　３－７　武蔵大
防大　０－５　東京大
防大　５－１　東海大
防大　２－１　中央大
（２勝２敗　Ｂプール３位）
５位－６位決定戦
防大　４－２　成城大
（２部５位）
・秋季関東学生ホッケーリーグ
２部Ａプール
防大　２－６　立教大
防大　０－１　東京大
防大　３－１　木更津大
防大　３－２　中央大
（２勝２敗　Ａプール３位）
５位－６位決定戦
防大　２－１　成城大
（２部５位）

第６０期（平成２７年度）

・春季関東学生ホッケーリーグ
２部Ａプール
防大　１－１　東京大
防大　２－３　立教大
防大　２－１　横浜市立大
防大　３－０　中央大
（２勝１敗　Ａプール３位）
５位－６位決定戦
防大　１－５　武蔵大
（２部６位）
・秋季関東学生ホッケーリーグ
２部Ｂプール
防大　２－５　立教大
防大　２－２　中央大
防大　０－２　東京大
防大　１－２　横浜市立大
（３敗１分 Ｂプール４位）
７位－８位決定戦
防大　２－０　成城大
（２部７位）

第６１期（平成２８年度）

・春季関東学生ホッケーリーグ
２部Ｂプール
防大　３－３　武蔵大
防大　２－１　一橋大
防大　３－２　横浜市立大
防大　３－２　東海大
（４勝　Ｂプール１位）
１位－２位決定戦
防大　１－３　一橋大
（２部２位）
１部－２部入替戦
防大　０－１５　慶応大
・秋季関東学生ホッケーリーグ
２部Ｂプール
防大　０－１　学習院大
防大　３－２　横浜市立大
防大　１－２　立教大
防大　３－０　中央大
（２勝２敗　Ｂプール３位）
５位－６位決定戦
防大　０－１　横浜市立大
（２部６位）
・全日本インカレ
２回戦　防大　2-2　関西大
ＳＯ0-3

第６２期（平成２９年度）

・春季関東学生ホッケーリーグ
２部Ａプール
防大　０－３　東京大
防大　０－２　立教大
防大　３－２　東海大
防大　１－２　武蔵大
（１勝３敗　Ａプール４位）
７位－８位決定戦
防大　１－２　武蔵大
（２部８位）
２部－３部入替戦
防大　４－１　専修大
（２部残留）
・秋季関東学生ホッケーリーグ
２部Ａプール
防大　０－２　立教大
防大　２－０　横浜市立大
防大　３－４　東海大
防大　１－１　成城大
（１勝１分２敗）
７位－８位決定戦
防大　１－２　横浜市立大
２部－３部入替戦
防大　３－１　筑波大
（２部残留）

第６３期（平成３０年度）

春季関東学生ホッケーリーグ
２部Ａプール
防大　１－４　学習院大
防大　１－２　東海大
防大　０－３　武蔵大
（０勝３敗　Ａプール４位）
７位－８位決定戦
防大　１－0　成城大
（２部残留）
・秋季関東学生ホッケーリーグ
２部Ｂプール
防大　２－１　東海大
防大　０－４　横浜市立大
防大　０－４　学習院大
（１勝２敗　Ｂプール３位）
５位－６位決定戦
防大　０－１　武蔵大
（２部残留）

女子ホッケー部

第５４期（平成２１年度）

・春季関東学生ホッケーリーグ
２部Ｂプール
防大　０－４　成城大
防大　２－１　武蔵大
防大　２－１　東京女子大
防大　１－２　立教大
３位－４位決定戦
防大　０－２　成城大
（３敗　２部４位）
・秋季関東学生ホッケーリーグ
２部Ｂプール
防大　１－３　立教大
防大　２－１　武蔵大
防大　３－０　横浜市立大
防大　２－３　上智大
３位－４位決定戦
防大　０－１　成城大
（２部４位）

第５５期（平成２２年度）

春季関東学生ホッケーリーグ
２部
防大　２－１　横浜市立大
防大　２－１　立教大
（２部１位）
１部―２部入替戦
防大　１－０　学習院大
（１部昇格）
・東日本インカレ
１回戦 防大 １－０ 上智大
２回戦 防大 ０－10 早稲田大
・秋季関東学生ホッケーリーグ
１部リーグ
防大　０－11　東京農業大
防大　０－７　山梨学院大
防大　０－７　慶応義塾大
防大　１－２　法政大
７位－８位決定戦
防大　２－１　東海大
（１部７位）
１部－２部入替戦
防大　０－１　成城大
（１部繰り上げ残留）

第５６期（平成２３年度）

・春季関東学生ホッケーリーグ
１部
防大　０－20　山梨学院大
防大　０－８　慶応義塾大
７位－８位決定戦
防大　１－６　立教大
（３敗　１部８位）
１部－２部入替戦
防大　０－３　東海大
（２部降格）
・秋季関東学生ホッケーリーグ
２部Ｂプール
防大　０－０　東洋英和女学院大
防大　１－０　津田塾大
防大　１－３　学習院大
防大　０－１　立教大
（２勝２敗　Ｂプール２位）
３位－４位決定戦
防大　０－２　横浜市立大
（２部４位）

第５７期（平成２４年度）

・春季関東学生ホッケーリーグ
２部Ａプール
防大　６－１　武蔵大
防大　３－０　法政大
防大　０－４　成城大
（２勝１敗　Ａプール２位）
防大　３－１　津田塾大
１位－２位決定戦
防大　０－４　成城大
（２部２位）
１部－２部入替戦
防大　０－５　東海大
・秋季関東学生ホッケーリーグ
２部Ｂプール
防大　２－２　武蔵大
防大　１－０　法政大
防大　０－０　上智大
防大　０－１　学習院大
（２勝１分１敗 Ｂプール２位）
３位－４位決定戦
防大　１－１　上智大
ＰＳ２－０
（２部３位）

第５８期（平成２５年度）

・春季関東学生ホッケーリーグ
２部Ｂプール
防大　２－２　東洋英和女学院大
防大　８－０　フェリス女学院大
防大　０－０　学習院大
防大　４－１　武蔵大
（２勝２分　Ｂプール２位）
防大　５－１　横浜市立大
１位－２位決定戦
防大　０－４　学習院大
（２部２位）
１部－２部入替戦
防大　０－３　成城大
（２部残留）
・秋季関東学生ホッケーリーグ
２部Ｂプール
防大　６－０　東京女子大
防大　２－３　上智大
防大　１－１　東洋英和女学院大
防大　２－３　津田塾大
（１勝２敗１分７位）

第５９期（平成２６年度）

・春季関東学生ホッケーリーグ
２部Ｂプール
防大　０－２　津田塾大
防大　４－１　東洋英和女学院大
防大　２－１　東京大
防大　１－１　東海大
（２勝１分２敗）
防大　０－13　東京農業大
３位－４位決定戦
防大　０－１　津田塾大
（２部４位）

・秋季関東学生ホッケーリーグ
２部Ｂプール
防大　０－０　東洋英和女学院大
防大　１－０　津田塾大
防大　１－３　学習院大
防大　０－１　立教大
（２勝２敗　Ｂプール２位）
３位－４位決定戦
防大　０－２　横浜市立大
（２部４位）

第６０期（平成２７年度）

・春季関東学生ホッケーリーグ
２部Ａプール
防大　１－１　東洋英和女学院大
防大　０－２　東京大
防大　０－４　武蔵大
（１勝２敗）
５位―６位決定戦
防大　１－２　津田塾大
（２部６位）
・秋季関東学生ホッケーリーグ
２部Ｂプール
防大　０－４　成城大
防大　２－０　東海大
防大　１－０　東京女子大
防大　０－２　横浜市立大
（２勝２敗　Ｂプール２位）
５位－６位決定戦
防大　１－０　上智大
（２部５位）

第６１期（平成２８年度）

・春季関東学生ホッケーリーグ
２部Ａプール
防大　１－１　東洋英和女学院大
防大　０－３　東京大
防大　２－２　横浜市立大
５位－６位決定戦
防大　０－１　上智大
（２部６位）
・秋季関東学生ホッケーリーグ
２部Ｂプール
防大　０－２　津田塾大
防大　５－０　東海大
防大　０－０　横浜市立大
防大　０－３　武蔵大
（１勝３敗）
防大　０－０　東洋英和女学院大
ＳＯ２－３

第６２期（平成２９年度）

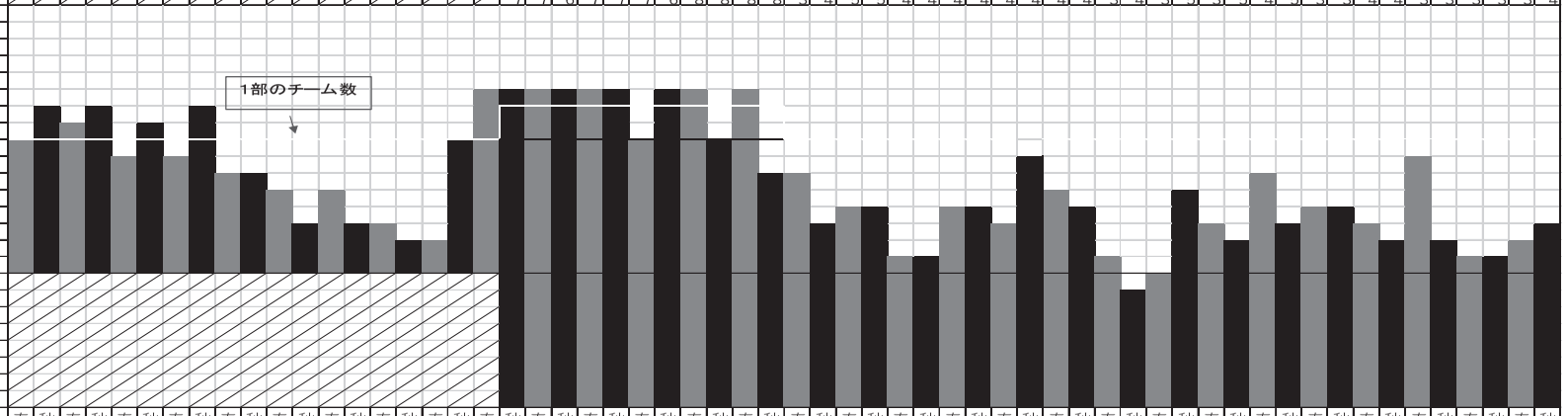
・春季関東学生ホッケーリーグ
２部Ｂプール
防大　３－０　武蔵大
防大　１－０　上智大
防大　１－１　東京女子大
防大　４－０　東海大
（３勝１分）
防大　１－０　横浜市立大
１位－２位決定戦
防大　２－１　東京女子大
（２部１位）
１部―２部入替戦
防大　２－１　学習院大
（１部昇格）
・秋季関東学生ホッケーリーグ
１部Ｂプール
防大　０－37　山梨学院大
防大　０－27　東京農業大
防大　０－５　慶応義塾大
（３敗　Ｂプール２位）
防大　４－３　立教大
５位－６位決定戦
防大　０－６　慶応義塾大
（１部６位）
（１部残留）

第６３期（平成３０年度）

・春季関東学生ホッケーリーグ
１部Ｂプール
防大　０－12　東京農業大
防大　０－17　駿河大
防大　１－６　立教大
（０勝３敗）
７位－８位決定戦
防大　０－１　横浜市立大
（１部８位）
１部－２部入替戦
防大　０－１　学習院大
（２部降格）
・秋季関東学生ホッケーリーグ
２部Ａプール
防大　１－１　津田塾大
防大　１－０　東京女子大
防大　３－１　武蔵大
防大　１－２　東洋英和女学院大
１位－２位決定戦
防大　３－２　津田塾大
（２部１位）
１部―２部入替戦
防大　１－２　学習院大

防大フィールドホッケー部（男子）
関東学生リーグ６０年の戦績（第４期生～第３３期生）

防大アイルドホッケー部（男子）
関東学生リーグ６０年の戦績（第３４期生～第６３期生）

部長	木村　康之	中溝　高好	佐藤　純一	大野　友則	北島　正弘	宮田　喜壽
総監督		下御領臨	原田精武	出口憲七	上田光一郎	野村佳正	原田正則	未本紀彦
監督	上田忠宏	加藤誠	緒方一成	大林康夫	下御領臨	樺山一孝	谷坂忠俊	堀内教夫	大林康夫	牧孝之	針北和文	友ノ晋吾	堀内教夫	石橋哲人	井熊佳祐	来栖正則	田村一晃	朝槻一仁
								滝口和男	廣谷雅臣					宮崎大		後藤聡一郎		
通史	波乱期	現代ホッケーへの転換期（ルール改正、人工芝グラント等）																
リーグ制	2部制 1部８チーム・2部ＡＢプール制	1部・2部６チーム制	3部制 1部・2部８チームＡＢプール制															
チーム数 1部	8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 8 8	8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8
チーム数 2部	10 10 9 11 10 11 11 11 11 11 10 10 10 11 10 11 11 11 11 11	6 7 7 6 7 7 7 6 8 8 8 8 3 4 5 5 4 4 4 4	4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4	4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4	4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4	4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4	4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4	4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4
チーム数 3部		7 7 6 7 7 7 6 8 8 8 8 3 4 5 5 4 4 4 4 4	4 4 3 4 3 5 3 5 4 5 3 3 4 4 3 3 3 3 3 4					
1部順位								
2部順位								
3部順位								
春季・秋季	春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋	春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋	春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋	春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋	春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋	春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋	春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋	春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋
期別	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
年度	平1	平2	平3	平4	平5	平6	平7	平8	平9	平10	平11	平12	平13	平14	平15	平16	平17	平18	平19	平20	平21	平22	平23	平24	平25	平26	平27	平28	平29	平30
トピックス等	2部優勝・1部昇格	入替戦・1部残留	入替戦・2部降格	入替戦・1部昇格	入替戦・2部降格	入替戦・1部昇格・女子入部	入替戦・2部降格	事務局を桧町へ移転	2部優勝・1部昇格	創設40周年・入替戦・1部残留	入替戦・1部残留	入替戦・1部残留	入替戦・2部降格	2部優勝・入替戦・1部昇格	入替戦・1部残留・インカレベスト8	入替戦・2部降格	2部優勝・入替戦・1部昇格	入替戦・2部降格	入替戦・2部残留	入替戦・2部残留	創設50周年・入替戦・2部残留	入替戦・3部降格	入替戦・2部昇格	入替戦・2部残留	入替戦・2部残留	入替戦・2部残留	入替戦・2部残留	入替戦・2部残留	入替戦・2部残留	入替戦・2部残留
4学年	6	11	4	14	11	8	4	8	8	5	10	6	5	14	4	6	13	9	2	10	9	3	6	8	13	12	6	10	12	13
3学年	11	4	14	11	8	4	8	8	5	10	6	5	14	4	5	15	10	6	10	9	4	6	9	13	12	7	11	12	13	4
2学年	4	14	11	8	4	8	8	5	10	6	5	14	4	5	17	10	7	10	9	**6**	8	10	13	12	7	11	14	14	5	11
1学年	14	11	8	4	8	8	5	10	6	5	14	4	5	17	10	10	10	10	**7**	7	10	13	15	7	12	14	16	7	9	14
合計（人）	35	40	37	37	31	28	25	31	29	26	35	29	28	40	36	41	40	35	28	32	31	32	43	40	44	44	47	43	39	42

防大フィールドホッケー部（女子）
関東学生リーグ６０年の戦績（第４０期生～第６３期生）

歴代部長、監督、主将、主務名簿

歴代部長

	氏　名	在　任　期　間
初　　代	加　藤　　豊	Ｓ３４．　４～Ｓ３６．　８
第２代	斉　田　正　次	Ｓ３６．　９～Ｓ３７．　８
第３代	木　村　康　之	Ｓ３７．　８～Ｈ　３．　３
第４代	中　溝　高　好	Ｈ　３．　４～Ｈ　８．　３
第５代	佐　藤　純　一	Ｈ　８．　４～Ｈ１５．　３
第６代	大　野　友　則	Ｈ１５．　４～Ｈ２１．　３
第７代	北　島　正　弘	Ｈ２１．　３～Ｈ２４．　３
第８代	宮　田　喜　壽	Ｈ２４．　３～　現　　在

歴代総監督

	氏　名	在　任　期　間
初　　代	下御領　　臨	Ｈ　８．　４～Ｈ　９．　３
第２代	原　田　精　武	Ｈ　９．　４～Ｈ１３．　７
第３代	出　口　憲　七	Ｈ１３．　８～Ｈ１６．　３
第４代	上　田　光一郎	Ｈ１９．　４～Ｈ２１　．３
第５代	野　村　佳　正	Ｈ２１．　３～Ｈ２７．　３
第６代	原　田　正　徳	Ｈ２７．　３～Ｈ２９．　８
第７代	末　本　紀　彦	Ｈ２９．　８～　現　　在

歴代（男子監督）

	氏　名	在　任　期　間
初　　代	船　越　治三朗	Ｓ３４．　２～Ｓ４２．　９
第２代	奥　野　貞　廣	Ｓ４２．１０～Ｓ４４．　３
第３代	早　川　和　義	Ｓ４４．　４～Ｓ４６．１２
第４代	井　本　敏　夫	Ｓ４６．１２～Ｓ４７．　８
第５代	羽　藤　忠　和	Ｓ４７．　８～Ｓ４８．　８
第６代	山　崎　召　三	Ｓ４８．　８～Ｓ４８．１２
第７代	早　川　和　義	Ｓ４８．１２～Ｓ５０．１２
第８代	溝　内　好　明	Ｓ５０．１２～Ｓ５２．　８

第 9 代	森 村 正 昭	S53. 8～S54. 3
第10代	木 村 康 之	S54. 3～S55. 1
第11代	堀 内 洋 治	S55. 1～S56. 8
第12代	山 崎 文 夫	S56. 8～S57. 8
第13代	原 田 精 武	S57. 8～S59. 8
第14代	関 芳 雄	S59. 8～S61. 3
第15代	河 村 修 二	S61. 3～S62. 7
第16代	出 口 憲 七	S62. 7～S63. 8
第17代	上 田 忠 宏	S63. 8～H 3. 3
第18代	加 藤 誠	H 3. 4～H 5. 3
第19代	緒 方 一 成	H 5. 4～H 7. 3
第20代	大 林 康 夫	H 7. 4～H 9. 3
第21代	下御領 臨	H 9. 4～H10. 3
第22代	樺 山 一 孝	H10. 4～H11. 3
第23代	谷 坂 忠 俊	H11. 4～H12. 3
第24代	滝 口 和 男	H12. 4～H14. 3
第25代	堀 内 教 夫	H12. 4～H15. 3
第26代	廣 谷 雅 臣	H14. 8～H16. 7
第27代	大 林 康 夫	H15. 4～H17. 3
第28代	牧 孝 行	H17. 4～H18. 7
第29代	針 北 和 文	H18. 8～H19. 3
第30代	中 島 康 弘	H19. 4～H20. 3
第31代	友 野 晋 吾	H20. 4～H21. 3
第32代	堀 内 教 夫	H21. 4～H22. 3
第33代	石 橋 哲 人	H22. 4～H23. 3
第34代	井 熊 佳 祐	H23. 4～H24. 6
第35代	来 栖 正 則	H24. 6～H26. 3
第36代	田 村 一 晃	H26. 4～H29. 3
第37代	朝 槻 一 仁	H29. 4～ 現 在

歴代女子監督

	氏 名	在 任 期 間
初 代	上 田 知 元	H 5. 8～H 6. 8
第 2 代	石 橋 哲 人	H 6. 8～H 7. 3
第 3 代	深 山 純 一	H 7. 4～H 9. 3
第 4 代	興 梠 隆 博	H 9. 4～H 9. 7
第 5 代	樺 山 一 孝	H 9. 8～H10. 7
第 6 代	手倉森 勇 夫	H10. 8～H11. 7

第 7 代	甲 斐 志 直	H11. 8～H12. 7
第 8 代	山 崎 あゆみ	H12. 8～H13. 7
第 9 代	出 口 憲 七	H13. 8～H15. 3
第10代	野 村 佳 正	H15. 4～H17. 3
第11代	牧 孝 行	H17. 4～H18. 3
第12代	杉 山 智 彦	H18. 4～H18. 7
第13代	中 島 康 裕	H18. 8～H20. 3
第14代	堀 内 教 夫	H20. 4～H21. 3
第15代	石 橋 哲 人	H21. 4～H22. 3
第16代	金 野 浩 子	H22. 4～H24. 3
第17代	服 部 多 恵	H24. 4～H26. 3
第18代	木 村 香 織	H26. 4～H27. 7
第19代	大久保 亜李沙	H27. 8～H28. 3
第20代	久木田 知 也	H28. 4～H29. 3
第21代	川 上 智 寛	H29. 4～H29. 7
第22代	向 田 淳	H29. 8～ 現 在

主将・主務

	男子	
	主将	主務
第 4 期生	中 川 修	
第 5 期生	西 村 博 昭	荒 木 宏
第 6 期生	濵 田 泰 弘	
第 7 期生	小 田 淳 治	山 口 賢 介
第 8 期生	保 阪 初 男	松 浦 広 行
第 9 期生	羽 藤 久 信	遠 藤 貴 志
第10期生	紙 透 斉 喜 田 邦 彦	吉 岡 元
第11期生	木 村 忠 信	金 川 治 敬
第12期生	藤 井 敬 文	田 中 太
第13期生	関 芳 雄	池 田 等
第14期生	森 勉	河 野 芳 久
第15期生	山 崎 文 夫	高 橋 章 信
第16期生	笠 原 直 樹	庄 田 豊
第17期生	鈴 木 清 美	与 国 洋
第18期生	平 原 秀 幸	田 中 隆 夫
第19期生	白 取 稔	佐 藤 法 夫
第20期生	木 崎 俊 造	吉 田 徳 明

第２１期生	藤井　茂	福井正明		
第２２期生	加藤　誠	福井正明		
第２３期生	出口憲七	高橋正明		
第２４期生	鈴木靖雄	石川篤行		
第２５期生	上田知元	吉井秀信		
第２６期生	矢野文吾	川野克典		
第２７期生	橋本尚典	興梠隆博		
第２８期生	佐野佳幸	石田英司		
第２９期生	樺山一孝	中村信也		
第３０期生	堀内教夫	田辺光一郎		
第３１期生	手倉森勇夫	長田　司		
第３２期生	立川健蔵	仙波　浩		
第３３期生	石橋哲夫	大澤　満		
第３４期生	鈴木雄一	篠田和彦		
第３５期生	武田敏裕	廣谷雅臣		
第３６期生	大野　真	加藤和彦		
第３７期生	小野　保	荒木紀雄		
第３８期生	今宮泰宜	岡野佳幸	女子	
第３９期生	福本　亘	菊池和弘	主将	主務
第４０期生	玉井寛也	多田裕之	鈴木浩子	古賀有子
第４１期生	増田寿光	原田明徳	川口ふみ	
第４２期生	末本紀彦	加藤　豊	濵田千尋	川澄えみ
第４３期生	浅原政治	太田　光	藤田香奈	
第４４期生	渡邊将寛	中原　聡	小坂亜矢	桜田早苗
第４５期生	田之上雄二	中島和寛	相良直美	和田陽子
第４６期生	渡部　祥	平山昌寛	山口　梓	上野紗代
第４７期生	古賀健一郎	藤田晋介	古金久美子	
第４８期生	手塚洋光		鳥畑聡子	
第４９期生	山ノ内　武		谷山亜希子	
第５０期生	東海林　真		森永通子	
第５１期生	田村一晃	三田剛史	服部多恵	
第５２期生	久木田知也	後藤聡一郎	岡林　希	小野寺茉莉
第５３期生	河井勇樹	西村久志 家村国樹	比留間聡子	濵田　雪
第５４期生	丹　祥雄	種本　顕	後藤真代	石下寿美代
第５５期生	中田道也	樫原一将	小野亜李沙	石下寿美代
第５６期生	石井誠人	小野俊輔	池田恵理	吉牟田あずみ
第５７期生	荻原弘範	藤川信幸	岸田千枝	山木はるか
第５８期生	駒野成俊	岡部真博	片岡美紀	小谷夏穂

第５９期生	山本聖治 中川悠	中村誠和	白簱あず沙	土器手桃
第６０期生	小田原啄	小山恭平	山口智子	西潟芽衣
第６１期生	佐々木誠	伊藤龍二		
第６２期生	山口貴大	俵谷裕紀 大久保湧樹	杉山佳那恵	生田麻衣
第６３期生	園井寧人		中畑美紀	五十嵐千明

小原台ホッケークラブ会員名簿・防大ホッケー部員名簿

歴代会長

	氏　名	期別	在　任　期　間
初　代	松　井　典　雄	第　４期	Ｓ４７．　２～Ｈ１３．　２
第２代	山　口　賢　介	第　７期	Ｈ１３．　２～Ｈ１６．　２
第３代	落　合　　宏	第　８期	Ｈ１６．　２～Ｈ２１．　２
第４代	関　　芳　雄	第１３期	Ｈ２１．　３～Ｈ２５．　２
第５代	福　井　正　明	第２１期	Ｈ２５．　２～現　　在

特別会員

第４代部長	中　溝　高　好
第６代部長	大　野　友　則
第３代、第７代監督	早　川　和　義
故船越治三郎初代監督ご夫人	船　越　豊　子
第７代部長	北　島　正　弘
故落合宏（８期）第３代会長ご夫人	落　合　典　子

期別名簿

期別（年度）	氏　　名	出身高校　（出身地）
第４期生 （昭和 34 年度）	田　中　　到	筑紫ヶ丘　（福　岡）
	中　川　　修	岡山朝日　（岡　山）
	（故）松　井　典　雄	旭川東　（北海道）
第５期生 （昭和 35 年度）	青　木　　治	金沢桜丘　（石　川）
	荒　木　　宏	高　　山　（岐　阜）
	塩　田　靖　男	厚　　狭　（山　口）
	築　柴　哲　彦	福　　岡　（福　岡）
	西　村　博　昭	熊　　本　（熊　本）
	本　田　敏　郎	金沢二水　（石　川）
	宮　武　恵　哉	城　　東　（徳　島）
	安　田　進　紀	一　　宮　（愛　知）
	（故）山　田　久　夫	横 須 賀　（神奈川）
第６期生	園　田　健　士	大分舞鶴　（大　分）

第６期生 （昭和 36 年度）	堂　脇　　樹	都城泉丘　（宮　崎）
	濵　田　泰　弘	岡 山 工　（高　知）
	藤　原　　博	誠 之 館　（広　島）
	星　野　陸　宏	桃　　山　（京　都）
	（故）山　口　　彰	諫　　早　（長　崎）
第７期生 （昭和 37 年度）	小　田　淳　治	防　　府　（山　口）
	嘉　納　　肇	大阪学芸大附属（兵庫）
	永　野　　章	門 司 東　（福　岡）
	原　田　精　武	諫　　早　（長　崎）
	溝　内　好　昭	佐　　賀　（佐　賀）
	山　口　賢　介	長 崎 西　（長　崎）
第８期生 （昭和 38 年度）	市　川　　淳	松本深志　（長　野）
	（故）落　合　　宏	都城泉丘　（宮　崎）
	下　津　和　久	済 々 黌　（熊　本）
	中　川　　彰	観音寺第一（香　川）
	保　阪　初　男	葦　　崎　（山　梨）
	松　浦　紘　之	隠　　岐　（島　根）
	三　成　裕　二	東京戸山　（島　根）
	山　田　浩　二	佐　　賀　（佐　賀）
第９期生 （昭和 39 年度）	（故）笠　井　好　秋	城　　北　（徳　島）
	（故）遠　藤　貴　志	広島国泰寺（山　口）
	庄　島　久　信	佐　　賀　（佐　賀）
	羽　藤　忠　和	今 治 西　（愛　媛）
	福　山　嗣　郎	佐　　賀　（佐　賀）
	堀　内　洋　治	三 本 松　（香　川）
	（故）松　島　　淳	札 幌 東　（北海道）
第１０期生 （昭和 40 年度）	岡　本　正　雄	福井大野　（奈　良）
	紙　透　　齊	横 浜 南　（神奈川）
	喜　田　邦　彦	兵　　庫　（香　川）
	木　村　滋　彦	種 子 島　（大　阪）
	座　本　勝　之	横 須 賀　（京　都）
	寺　島　俊　介	東京立川　（長　野）
	福　岡　典　秋	新居浜東　（愛　媛）
	山　中　啓　吉	宇　　佐　（大　分）
	吉　岡　　元	米 子 東　（鳥　取）
第１１期生 （昭和 41 年度）	井　本　敏　夫	熊　　本　（熊　本）
	梅　野　　正	大　　村　（長　崎）
	金　川　治　敬	国　　立　（東　京）
	木　村　忠　信	横 須 賀　（神奈川）
	遠　竹　郁　夫	出　　水　（鹿児島）

第１１期生 （昭和 41 年度）	松　上　　徹	米子東　（鳥　取）
	室　　重　矩	竹　　田　（大　分）
	（故）乙黒勤吾（旧姓樋具）	甲府第一　（山　梨）
第１２期生 （昭和 42 年度）	石　井　智　顕	坂　　出　（香　川）
	石　田　　節	大分舞鶴　（大　分）
	石　田　博　樹	中津北　（大　分）
	井　上　敏　和	中津南　（大　分）
	古　賀　英　松	佐　　賀　（佐　賀）
	田　中　　太	鶴見丘　（大　分）
	新　田　　豊	佐世保　（長　崎）
	野　本　三　蔵	松山北　（愛　媛）
	藤　井　敬　文	済々黌　（熊　本）
	山　崎　召　三	高　　松　（香　川）
第１３期生 （昭和 43 年度）	池　田　　等	宇　　佐　（大　分）
	河　野　　弘	大分工　（大　分）
	古　賀　辰　司	明　　善　（福　岡）
	佐　藤　義　信	函館東　（北海道）
	下　間　豊　隆	大　　村　（長　崎）
	関　　芳　雄	土浦第一　（茨　城）
	（故）長　　哲　司	福　　岡　（福　岡）
	中　野　　遵	唐津東　（佐　賀）
	森　村　正　昭	金沢泉丘　（石　川）
	（故）高　橋　武　敏	中津南　（大　分）
第１４期生 （昭和 44 年度）	岸　本　條太郎	熊　　本　（熊　本）
	木　村　誠　一	小田原　（神奈川）
	河　野　芳　久	宇和島　（愛　媛）
	末　次　正　憲	伊　　達　（北海道）
	豊　島　克　治	上野丘　（大　分）
	森　　勉	井　　原　（岡　山）
	山　川　和　夫	熊　　本　（熊　本）
第１５期生 （昭和 45 年度）	石　塚　　健	土浦第一　（茨　城）
	庄　崎　幸　夫	島　　原　（長　崎）
	高　橋　章　信	社　　（兵　庫）
	田母神　俊　雄	安　　積　（福　島）
	土　屋　洋　一	熊　　本　（熊　本）
	新　田　善　就	加世田　（鹿児島）
	萩　原　康　嗣	横須賀　（広　島）
	山　崎　文　夫	札幌南　（北海道）
	横　州　　茂	坂　　出　（香　川）
	（故）有　吉　広　蔵	島　　原　（長　崎）

第１６期生 （昭和 46 年度）	池　田　廣　春	福　　岡　（福　岡）
	岡　　眞　一	巣　　鴨　（東　京）
	笠　原　直　樹	松本県ヶ丘（長　野）
	北　　富　雄	砺　　波　（富　山）
	庄　田　　豊	熊　　谷　（埼　玉）
	高　島　誠　二	済々黌　（熊　本）
	長　嶋　敏　行	横浜翠嵐　（神奈川）
	野　口　充　男	土浦第一　（茨　城）
	渡　辺　文　泰	吉　　田　（山　梨）
第１７期生 （昭和 47 年度）	馬　詰　恭　一	東京文京　（高　知）
	川　越　清　孝	宮崎南　（宮　崎）
	澤　田　信　雄	佐賀武雄　（福　岡）
	下之薗　正　俊	国　　分　（鹿児島）
	鈴　木　清　美	山形南　（山　形）
	長谷川　礼　司	三本木　（青　森）
	森　田　昭　之	神　　崎　（佐　賀）
	与　国　　洋	山　　口　（山　口）
	（故）柴　田　文　夫	湘　　南　（青　森）
	（故）吉　川　　孝	砺　　波　（富　山）
第１８期生 （昭和 48 年度）	岡　田　　博	武　　蔵　（三　重）
	田　中　隆　夫	川　　崎　（神奈川）
	長　沢　正　尋	鳳　　鳴　（兵　庫）
	（故）平　原　秀　幸	鹿児島中央（鹿児島）
	稗　田　寿　志	光　　（山　口）
第１９期生 （昭和 49 年度）	宇　都　昌　治	甲　　南　（鹿児島）
	菊　川　俊　宏	鹿児島中央（鹿児島）
	齋　藤　　力	津久見　（熊　本）
	佐　藤　法　夫	倉吉東　（鳥　取）
	白　取　　稔	青　　森　（青　森）
	西　尾　茂　博	八　　代　（熊　本）
第２０期生 （昭和 50 年度）	沖　本　一　史	広島舟入　（広　島）
	木　崎　俊　造	竹　　田　（大　分）
	土　橋　一　太	茨　　木　（大　阪）
	中　野　憲　一	宇　　佐　（大　分）
	畠　山　洋　一	福大大濠　（福　岡）
	松　尾　茂　人	大　　村　（長　崎）
	吉　田　徳　明	茅ヶ崎　（東　京）
第２１期生 （昭和 51 年度）	河　村　修　二	八　　代　（熊　本）
	末　廣　治　之	国　　東　（大　分）
	藤　井　　茂	湯　　沢　（秋　田）

第２１期生	檜柑山　洋　一	甲　　南　（鹿児島）
第２２期生 （昭和 52 年度）	緒　方　一　成	熊商大附属（熊　本）
	加　藤　　誠	泉　　尾　（大　阪）
	萱　場　広　一	仙　台　二　（宮　城）
	熊　切　俊　文	磐　田　南　（静　岡）
	長　山　道　夫	北見北斗　（北海道）
	福　井　正　明	明　　石　（兵　庫）
	古　庄　大　喜	玉　　名　（熊　本）
	宮　園　謹　吉	宮　ノ　城　（鹿児島）
	山　田　一　生	済　々　黌　（熊　本）
	吉　永　春　雄	湘　　南　（熊　本）
第２３期生 （昭和 53 年度）	秋　元　由　昭	加　治　木　（鹿児島）
	内　村　純　博	城　　南　（佐　賀）
	太　田　　真	伊　　勢　（岡　山）
	高　橋　正　明	本　　庄　（埼　玉）
	出　口　憲　七	五　　島　（長　崎）
	猶　迫　和　弘	杵　　築　（大　分）
	宮　崎　礼　二	石　神　井　（東　京）
	守　屋　哲　夫	長　崎　北　（長　崎）
第２４期生 （昭和 54 年度）	上　田　忠　宏	湘　　南　（滋　賀）
	川　口　恒　美	別府鶴見丘（福　岡）
	河　内　昭　雄	上　　田　（長　野）
	重　富　徳　夫	湘　　南　（島　根）
	白　井　　努	白　　河　（福　島）
	菅　田　雅　之	津　　山　（岡　山）
	（故）鈴　木　靖　雄	木　更　津　（千　葉）
	武　藤　正　美	大　　曲　（秋　田）
	森　　良　雄	開　　成　（東　京）
	米本篤行（旧姓石川）	千　　葉　（千　葉）
第２５期生 （昭和 55 年度）	上　田　知　元	豊　　津　（福　岡）
	川　口　博　司	京　　都　（福　岡）
	小　林　　満	八　　戸　（青　森）
	阪　井　清　一	藤　　島　（福　井）
	杉　本　　務	柳　　井　（山　口）
	谷　口　俊　英	相　　原　（兵　庫）
	（故）吉　井　秀　信	熊　毛　南　（山　口）
第２６期生 （昭和 56 年度）	石　橋　佳　夫	成　　東　（千　葉）
	太　田　牧　哉	大　　曲　（秋　田）
	川　野　克　典	小　　林　（宮　崎）
	熊　谷　　晃	大　　濠　（福　岡）

第２６期生 （昭和 56 年度）	下御領　　臨	大　　口　（鹿児島）
	矢　野　文　吾	京　　都　（福　岡）
第２７期生 （昭和 57 年度）	大　西　裕　文	松　山　南　（愛　媛）
	大　林　康　夫	済　々　黌　（熊　本）
	加　減　幸　良	岸　和　田　（大　阪）
	深山純一（旧姓小林）	横　須　賀　（神奈川）
	興　梠　隆　博	豊　橋　東　（熊　本）
	迫　間　信次郎	鹿児島中央（鹿児島）
	佐　藤　正　久	福　　島　（福　島）
	鈴　木　昌　芳	木　更　津　（千　葉）
	刀　根　英　克	札幌北陵　（北海道）
	中　尾　博　孝	五　　島　（長　崎）
	芳　賀　直　樹	宮　　古　（岩　手）
	橋　本　尚　典	済　々　黌　（熊　本）
	堀　　博　幸	延　　岡　（熊　本）
	（故）星　田　徹　二	新居浜西　（愛　媛）
第２８期生 （昭和 58 年度）	石　田　英　司	広島舟入　（広　島）
	蒲　生　信　一	都城泉ヶ丘（宮　崎）
	佐　野　佳　幸	木　更　津　（千　葉）
	柴　谷　淳　志	大館鳳鳴　（秋　田）
	鈴　木　峰　浩	新　　潟　（新　潟）
	高　倉　慧　喜	北　　条　（兵　庫）
	遠目塚　　進	科学技術学園（宮崎）
	堀　　誠一郎	熊本第二　（熊　本）
	八下田　和　夫	大　　濠　（富　山）
第２９期生 （昭和 59 年度）	板　倉　吉　成	八　幡　南　（福　岡）
	伊　藤　裕　二	津　　西　（三　重）
	勝　田　裕　之	京　　都　（福　岡）
	樺　山　一　孝	加　治　木　（鹿児島）
	桑　原　一　矢	五　　島　（長　崎）
	坂　田　治　民	新居浜西　（愛　媛）
	真　田　　勉	高　　田　（新　潟）
	柴　谷　敏　文	清　　風　（神奈川）
	染　田　良　弘	釧路湖陵　（北海道）
	中　村　信　也	加　治　木　（鹿児島）
	野　村　佳　正	藤　　島　（福　井）
	橋　爪　啓　介	金沢二水　（石　川）
	松　井　陽　一	加　治　木　（鹿児島）
	（故）宮　路　千　幸	小　　林　（宮　崎）
	山　口　耕　司	諫　　早　（長　崎）

第３０期生 （昭和 60 年度）	赤　城　禎　文	佐世保北　（長　崎）
	上　田　光一郎	岐　　阜　（岐　阜）
	大　石　理　夫	青　　雲　（長　崎）
	小　田　紀　彦	科学技術学園（山口）
	清　末　昭　宏	国　　東　（大　分）
	武　安　浩　一	加 治 木　（鹿児島）
	田　辺　光一郎	甲 府 南　（山　梨）
	土　居　義　明	千 葉 西　（千　葉）
	外　池　秀　典	大分雄城台（大　分）
	堀　内　教　夫	長　　野　（長　野）
	（故）松　本　治一郎	桃山学院　（大　阪）
	山　本　　伸	川　　棚　（長　崎）
第３１期生 （昭和 61 年度）	黒　木　康　一	高　　鍋　（宮　崎）
	清　水　和　人	防　　府　（山　口）
	竹　本　竜　司	少 工 校　（島　根）
	手倉森　勇　夫	札幌手稲　（北海道）
	長　田　　司	星　　稜　（石　川）
	松　本　眞　一	岩見沢東　（北海道）
	（故）森　津　晴　仁	西　　脇　（兵　庫）
	山　根　直　樹	松 江 東　（島　根）
第３２期生 （昭和 62 年度）	後　藤　博　明	少 工 校　（神奈川）
	櫻　田　嘉　弘	福　　岡　（福　岡）
	仙　波　　浩	松 山 西　（愛　媛）
	立　川　健　蔵	大　　村　（長　崎）
第３３期生 （昭和 63 年度）	石　橋　哲　人	城　　東　（東　京）
	大　澤　　満	向　　陽　（岐　阜）
	川　西　孝　司	可　　児　（岐　阜）
	前　野　恵　司	北 大 和　（奈　良）
	宮　路　貴　幸	指　　宿　（鹿児島）
第３４期生 （平成元年度）	稲　田　裕　一	函館中部　（北海道）
	長　田　英一郎	横 須 賀　（神奈川）
	篠　田　和　彦	高　　鍋　（宮　崎）
	鈴　木　雄　一	武　　南　（秋　田）
	西　谷　豊　広	福　　島　（宮　崎）
	舟　橋　洋　二	茨　　城　（茨　城）
第３５期生 （平成２年度）	青　山　幸一郎	井　　草　（岡　山）
	荒　木　克　美	船　　橋　（東　京）
	五　味　和　彦	北見北斗　（北海道）
	酒　本　清　二	五　　島　（長　崎）
	武　田　敏　裕	向　　陽　（愛　知）

第３５期生 （平成２年度）	友野晋吾	酒田東（山形）
	早川浩人	関西大倉（大阪）
	廣谷雅臣	輪島（石川）
	本間貴英	浜松西（静岡）
	松永慶二	明善（福岡）
	村田稔晃	福大大濠（福岡）
第３６期生 （平成３年度）	大野真	皇學館（三重）
	加藤和彦	徳島市立（徳島）
	中薗伸吾	春日（福岡）
	松尾修介	塔南（京都）
第３７期生 （平成４年度）	荒木紀雄	藤島（福井）
	大久保克久	小林（宮崎）
	小野保	盛岡第一（岩手）
	折出誠	海田（広島）
	小林將浩	富田林（大阪）
	島津健太	新庄（山形）
	田崎博文	川棚（長崎）
	粒崎唯史	川棚（長崎）
	橋本博己	札幌南（北海道）
	藤森丈士	米子東（鳥取）
	牧孝行	大検（新潟）
	真名井洋亨	五島（長崎）
	米田清光	夢野台（鳥取）
	（故）渡邊剛	東郷（愛知）
第３８期生 （平成５年度）	今宮泰宜	延岡西（宮崎）
	岡野佳幸	佐原（茨城）
	岸良知樹	れいめい（鹿児島）
	北山健一郎	ＰＬ学園（長崎）
	黒木勇人	福大大濠（福岡）
	津田充寿	鳴門（徳島）
	牧野貴志	丹生（福井）
	松田一洋	日向（宮崎）
	六野隆行	勝山（福井）
	渡辺和美	大田原（栃木）
第３９期生 （平成６年度）	片桐重崇	科学技術学園（北海道）
	上林晃	浜松西（静岡）
	菊地和弘	城西大川越（埼玉）
	中尾圭	福大大濠（福岡）
	西岡哲郎	三池（福岡）
	福本亘	川棚（長崎）

第３９期生 （平成６年度）	松　本　博　明	倉敷古城池（岡　山）
	松　本　政　貴	嘉　穂　（大　阪）
第４０期生 （平成７年度）	多　田　裕　之	福大大濠　（福　岡）
	谷　坂　忠　俊	川　棚　（長　崎）
	田　村　大二郎	城　東　（徳　島）
	玉　井　寛　也	札幌光星　（北海道）
	山　田　耕　平	広　尾　（東　京）
	一文字　祐　子	北　陸　（福　井）
	久保野　　舞	加治木　（鹿児島）
	金野浩子（旧姓鈴木）	藤枝東　（静　岡）
	坂本まゆみ（旧姓堺）	福　岡　（福　岡）
	永　原　　炎	桐蔭学園　（神奈川）
	塚口千枝（旧姓平松）	済々黌　（熊　本）
	吉田有子（旧姓古賀）	宇　土　（福　岡）
	村　野　郁　子	桜蔭学園　（東　京）
第４１期生 （平成８年度）	穴　田　和　義	加古川東　（兵　庫）
	阿　部　俊　文	三国丘　（大　阪）
	滝　口　和　男	呉宮原　（広　島）
	西　森　　明	土佐塾　（高　知）
	廣　瀬　明　徳	城　東　（徳　島）
	堀　　正　幸	今治北　（愛　媛）
	増　田　寿　光	五所川原　（青　森）
	花田めぐみ（旧姓熊田）	郡　上　（岐　阜）
	日高　ふみ（旧姓川口）	海　田　（広　島）
	山　崎　あゆみ	相模原　（神奈川）
第４２期生 （平成９年度）	大　隅　康　一	東北学院榴ヶ岡（宮城）
	沖　　賢　治	福大大濠　（福　岡）
	加　藤　　豊	向　陽　（愛　知）
	末　本　紀　彦	武　生　（福　井）
	仙　石　利　信	高　志　（福　井）
	中　尾　喜　洋	五　島　（長　崎）
	針　北　和　文	三　池　（福　岡）
	向　田　俊　之	羽　咋　（石　川）
	福　原　伸　一	徳　山　（山　口）
	川　澄　え　み	国　府　（愛　知）
	佐野綾子（旧姓三宅）	徳島文理　（徳　島）
	西田千尋（旧姓濱田）	高　知　（高　知）
	三ツ畑　久美子	斐　太　（岐　阜）
	三　原　道　代	大　宮　（宮　崎）
第４３期生	浅　原　政　治	今治西　（愛　媛）

第４３期生 （平成 10 年度）	大　内　泰　裕	磐　　城　（福　島）
	太　田　　光	下 関 西　（山　口）
	竹　内　規　高	浜 松 北　（静　岡）
	向　田　　淳	山 形 南　（山　形）
	新井香奈（旧姓藤田）	大 安 寺　（岡　山）
第４４期生 （平成 11 年度）	上　田　雅　俊	富　　山　（富　山）
	萱　沼　文　洋	学芸大附属（東　京）
	川　口　　繁	三　　池　（福　岡）
	北川　淳（旧姓徳田）	横浜翠嵐　（神奈川）
	佐　藤　裕　一	高 千 穂　（宮　崎）
	杉　山　智　彦	小 牧 南　（愛　知）
	中　原　　聡	市　　川　（埼　玉）
	野　末　拓　磨	浜 松 西　（静　岡）
	山　口　　護	金沢桜丘　（石　川）
	渡　邊　将　寛	可　　児　（岐　阜）
	鐘江和枝（旧姓宗像）	都立国際　（東　京）
	小　坂　亜　矢	東 葛 飾　（北海道）
	松下早苗（旧姓櫻田）	宇都宮女子（栃　木）
	福　満　明　美	東　　明　（大　分）
第４５期生 （平成 12 年度）	田之上　雄　二	延 岡 西　（宮　崎）
	（故）津　田　定　宏	北　　野　（大　阪）
	坪　根　慎　弥	弘 学 館　（佐　賀）
	中　島　和　寛	仙 台 一　（宮　城）
	中　島　康　裕	宮崎日大　（宮　崎）
	野　邊　隆　志	福　　島　（宮　崎）
	町元直美（旧姓相良）	長 崎 南　（長　崎）
	和　田　陽　子	大分東明　（大　分）
第４６期生 （平成 13 年度）	佐　藤　成　浩	盛岡第四　（岩　手）
	中　川　　彰	福大大濠　（福　岡）
	林　　貴　紘	岐　　阜　（岐　阜）
	平　山　昌　寛	対　　馬　（長　崎）
	渡　部　　祥	磐　　城　（福　島）
	上　野　紗　代	智辯和歌山（和歌山）
	山　口　　梓	西大和学園（神奈川）
第４７期生 （平成 14 年度）	浦　川　智　弘	八　　代　（熊　本）
	大　町　　真	長野吉田　（長　野）
	緒　方　　亮	八女学院　（福　岡）
	金　平　隆　二	北 広 島　（北海道）
	古　賀　健一郎	川　　棚　（長　崎）
	栄　谷　英　樹	広　　（広　島）

第４７期生 （平成 14 年度）	十　二　賢　眞	金　　沢　（石　川）
	只　野　義　典	帝　　京　（東　京）
	辻　　慎　二	旭 川 東　（北海道）
	中　村　哲　也	出　　水　（鹿児島）
	藤　田　晋　介	山 形 南　（山　形）
	水　関　謙　作	鹿　　沼　（北海道）
	山　田　　旭	九州国際大附属（福岡）
	和　田　昌　紘	岩　　国　（山　口）
	水関清美（旧姓田中）	三　　池　（福　岡）
	中山めぐみ（旧姓中）	小　　松　（石　川）
	藤　井　園　苗	板　　野　（徳　島）
	林久美子（旧姓古金）	城　　東　（徳　島）
	岩出美奈（旧姓山崎）	広島大泰寺（広　島）
第４８期生 （平成 15 年度）	阿　部　博　史	福 島 南　（福　島）
	佐　藤　夏　樹	済 々 黌　（熊　本）
	手　塚　洋　光	鹿　　沼　（北海道）
	山　内　　勉	横　　田　（神奈川）
	近藤理恵（旧姓植木）	鳥 取 東　（鳥　取）
	渡辺智江（旧姓川野輪）	水戸第一　（茨　城）
	橘ますみ（旧姓久保田）	県立横須賀（神奈川）
	鳥　畑　聡　子	宮　　古　（岩　手）
	鷹松喜子（旧姓宮内）	仙台育英　（宮　城）
	宮　川　真理子	日 大 三　（神奈川）
第４９期生 （平成 16 年度）	市　川　靖　二	三　　田　（兵　庫）
	浦　田　　卓	唐 津 東　（佐　賀）
	江内谷　剛　志	都城泉ヶ丘（宮　崎）
	川　原　輝　生	小　　松　（石　川）
	山ノ内　　武	桶　　脇　（鹿児島）
	奥　平　陽　子	高　　崎　（群　馬）
	谷　山　亜希子	明　　善　（福　岡）
第５０期生 （平成 17 年度）	小　松　昭　博	大阪桐蔭　（大　阪）
	東海林　　真	横　　手　（秋　田）
	白　田　悠　人	旭 川 東　（北海道）
	築　田　祐　樹	北摂三田　（兵　庫）
	土　器　裕　之	宮崎第一　（宮　崎）
	中　神　陽　平	光　　星　（北海道）
	野　口　祐　太	久 留 米　（福　岡）
	松　下　博　貞	袋　　井　（静　岡）
	宮　崎　　大	盛岡第三　（岩　手）
	宮　﨑　徳　明	富山県立大短大（東京）

第５０期生 （平成 17 年度）	矢　野　裕　樹	五ヶ瀬中等（宮　崎）
	山　内　哲　也	北　　海　（北海道）
	山　浦　允　史	修 猷 館　（福　岡）
	郡　司　彰　男	
	濵　田　正　輝	日大附属　（東　京）
	羽　牟　晋　也	指　　宿　（鹿児島）
	川　上　直　子	実践女子　（東　京）
	中　田　有　華	熊　　本　（熊　本）
	森　永　通　子	宇　　佐　（大　分）
第５１期生 （平成 18 年度）	井　熊　佳　祐	鵬　　翔　（宮　崎）
	来　栖　正　則	修　　道　（広　島）
	竹　正　智　紀	笠　　岡　（岡　山）
	田　村　一　晃	本 庄 東　（群　馬）
	中　嶋　教　善	長崎日大　（長　崎）
	三　田　剛　史	近大付属和歌山（和歌山）
	落　司　和　哉	清　　風　（大　阪）
	三　浦　圭　太	岩　　田　（大　分）
	円　田　孝　志	武　　雄　（佐　賀）
	服　部　多　恵	暁　　（三　重）
	矢　野　　翠	豊島岡女子（千　葉）
第５２期生 （平成 19 年度）	久木田　智　也	成　　東　（千　葉）
	後　藤　聡一郎	竹　　田　（大　分）
	岡　林　　希	土　　佐　（高　知）
	木　村　香　織	四天王寺　（大　阪）
	小野寺　茉　莉	秀光中等　（宮　城）
第５３期生 （平成 20 年度）	河　合　勇　樹	浜 松 北　（静　岡）
	西　村　　久	湘　　南　（愛　知）
	吉　留　栄　春	湘　　南　（鹿児島）
	笹　部　淡　二	清風南海　（大　阪）
	長　友　康　浩	宮崎日大　（宮　崎）
	徳　田　琢　磨	加　　北　（鹿児島）
	永　代　雄太郎	富山中部　（富　山）
	家　村　国　樹	甲陽学院　（兵　庫）
	比留間　聡　子	早稲田実業（東　京）
	野　口　ひかり	加藤学園　（静　岡）
	濵田雪（旧姓戸川）	中大杉並　（神奈川）
第５４期生 （平成 21 年度）	岡　本　昌　拓	小 野 田　（山　口）
	丹　　祥　雄	嘉　　穂　（福　岡）
	朝　槻　一　仁	横　　田　（島　根）
	種　本　　顕	鎌　　倉　（神奈川）

第５４期生 （平成 21 年度）	大　東　侑　史	長 久 手　（愛　知）
	垣　内　隼　斗	松 山 南　（愛　媛）
	風　野　光　輝	水　　城　（茨　城）
	山　本　洋　平	倉敷青陵　（岡　山）
	清　水　秀　俊	科学技術学園（群馬）
	後　藤　真　代	文　　徳　（熊　本）
第５５期生 （平成 22 年度）	中　田　道　也	掛 川 東　（静　岡）
	箕　輪　英　道	宮崎第一　（宮　崎）
	大久保亜李沙（旧姓小野）	屋　　代　（長　野）
	佐々木　　歩	湯　　沢　（秋　田）
	樫　原　一　将	滝　　川　（兵　庫）
	奥　津　杏　奈	聖カタリナ女子（愛媛）
	山　口　恵里佳	大阪桐蔭　（大　阪）
	杉野寿美代（旧姓石下）	宇都宮女子（栃　木）
	高　橋　朋　代	札 幌 北　（北海道）
第５６期生 （平成 23 年度）	石　井　誠　人	日大第三　（東　京）
	大　城　孝　徳	浜 松 北　（静　岡）
	小　野　俊　輔	サレジオ学院（東京）
	吉　田　幸　司	小　　野　（兵　庫）
	伊　東　　優	膳　　所　（滋　賀）
	壷　屋　　勇	諏訪二葉　（長　野）
	吉牟田あずみ（旧姓橘川）	都城泉ヶ丘（宮　崎）
	緒　方　陽　子	熊　　本　（熊　本）
	池　田　恵　理	横浜翠嵐　（神奈川）
第５７期生 （平成 24 年度）	岸　田　千　枝	天　　理　（奈　良）
	假屋はるか（旧姓山木）	日大習志野（千　葉）
	小野好美（旧姓二村）	常総学院　（千　葉）
	田　中　拓　己	科学技術学園（大阪）
	宗　形　勇　希	安積黎明　（福　島）
	荻　原　弘　範	北　　嶺　（北海道）
	藤　川　信　幸	清　　風　（大　阪）
	神　谷　哲　雄	東農大一　（東　京）
	緒　方　将　也	文　　徳　（熊　本）
	星　野　了　俊	熊　　谷　（埼　玉）
第５８期生 （平成 25 年度）	駒　野　成　俊	稚　　内　（北海道）
	陶　山　　開	筑 紫 台　（福　岡）
	福　本　達　也	九州学院　（熊　本）
	岡　部　真　博	武蔵越生　（埼　玉）
	宮　崎　翔　悟	清　　風　（奈　良）
	繁　縄　　佑	報徳学園　（兵　庫）

第５８期生 （平成 25 年度）	榊　原　康　弘	佐野日大　（埼　玉）
	藤　井　佑　弥	可　　児　（岐　阜）
	川　上　智　寛	城　　北　（東　京）
	芝　村　瑞　貴	常翔学園　（大　阪）
	篠　崎　聖　陽	市原中央　（千　葉）
	上　田　満寿夫	オイスカ　（長　野）
	高　塚　　翼	三　　木　（兵　庫）
	片　岡　美　樹	関西大倉　（大　阪）
	木柗理恵（旧姓小川）	向陽橘香館（長　崎）
	小　谷　夏　穂	宮崎日大　（宮　崎）
	黒　澤　葉菜子	神戸女学院（兵　庫）
第５９期生 （平成 26 年度）	中　川　　悠	鹿　　屋　（鹿児島）
	佐　藤　寛　樹	済々黌　（熊　本）
	荒　木　龍　童	筑紫台　（福　岡）
	高江洲　竣　太	那覇国際　（沖　縄）
	合　田　智　紀	佐世保南　（長　崎）
	芝　崎　大　河	中部大学春日丘（愛知）
	林　　文　乃	北海道大麻（北海道）
	中　川　　陽	熊　　本　（熊　本）
	中　村　誠　和	富岡東　（徳　島）
	長谷川　達　也	近大福山　（広　島）
	土器手　　桃	彦根東　（滋　賀）
	山　本　聖　治	桜　　美　（東　京）
	斉　藤　剛　志	加藤学園暁秀（静岡）
	白　簱　あず沙	成　　蹊　（東　京）
	内山由貴（旧姓松尾）	育徳館　（福　岡）
第６０期生 （平成 27 年度）	小田原　　啄	都城泉ヶ丘（宮　崎）
	辻　　崇　成	札幌光星　（北海道）
	小　山　恭　平	山形南　（山　形）
	木　谷　将　人	米子東　（鳥　取）
	宮　川　直　哉	長崎日大　（長　崎）
	田　村　洋　人	京　　都　（福　岡）
	山　口　智　子	近大附属　（大　阪）
	和　田　久美子	白　　陵　（兵　庫）
	辻　本　真喜子	野　　田　（山　口）
	西　潟　芽　衣	国際情報　（新　潟）
	渋　谷　智早妃	初芝富田林（大　阪）
	辻　汐里（旧姓横川）	淑徳与野　（埼　玉）
第６１期生 （平成 28 年度）	會　田　怜　史	仙台一高　（宮　城）
	青　柳　順　也	松本深志　（長　野）

第６１期生 （平成 28 年度）	伊　藤　龍　二	静　　岡　（静　岡）
	上　松　　遥	淑徳巣鴨　（東　京）
	佐々木　　誠	学 習 院　（東　京）
	大　道　和　起	比 叡 山　（滋　賀）
	溝　口　翔　己	西武文理　（東　京）
	森　　智　祥	古　　川　（宮　城）
第６２期生 （平成 29 年度）	東　　雄　大	高　　津　（大　阪）
	内山田　吉　希	日本大学東北（福島）
	大久保　湧　樹	国　　府　（愛　知）
	梶　並　織　人	桐蔭学園　（神奈川）
	田　中　裕　志	八 戸 北　（青　森）
	俵　谷　裕　紀	札 幌 南　（北海道）
	中　田　峻　平	藤　　島　（福　井）
	林　　和　希	高　　岡　（富　山）
	安　田　泰　知	東 福 岡　（福　岡）
	山　口　貴　大	本庄第一　（埼　玉）
	杉　山　佳那恵	大津緑洋　（山　口）
	生　田　真　依	時 習 館　（愛　知）
	出　水　里　奈	元 石 川　（神奈川）
第６３期生 防大４年 （平成 30 年度）	池　田　正　紀	鞍　　手　（福　岡）
	池　田　龍　介	福大大濠　（福　岡）
	漆　間　亮　介	上 野 丘　（大　分）
	小野原　　健	筑　　陽　（福　岡）
	後　藤　勇一郎	城西大川越（福　岡）
	園　井　寧　人	成立学園　（東　京）
	園　田　隼　也	静岡学園　（静　岡）
	成　井　理　人	南　　（神奈川）
	半　沢　拓　也	福島成蹊　（福　島）
	松　岡　倫太郎	宇　　部　（山　口）
	宮　川　　純	駿台甲府　（山　梨）
	三　輪　景　虎	宮崎大宮　（宮　崎）
	吉　村　賢太朗	高 山 西　（岐　阜）
	五十嵐　千　明	帝　　京　（東　京）
	潮　　佐都子	渋谷学園渋谷（東京）
	君　島　奈々未	矢 板 東　（栃　木）
	木　村　幸　映	済美平成　（愛　媛）
	島　田　万莉子	四 日 市　（三　重）
	成　瀬　蒔　温	多治見北　（岐　阜）
	中　畑　美　紀	関大第一　（兵　庫）
	濱　田　百合子	共立女子　（千　葉）

防大フィールドホッケー部創設６０周年記念行事準備委員会

【総合指導】

防衛大学校ホッケー部部長　宮　田　喜　壽
小原台ホッケークラブ会長　福　井　正　明

【委員長】　第３８期生　岸　良　知　樹
補佐　第３８期生　松　田　一　洋
補佐　第３８期生　北　山　健一郎

【総括Ｇｐ】

長　第４０期生　谷　坂　忠　俊
第４２期生　西　田　千　尋
第４７期生　水　関　謙　作
第４８期生　佐　藤　夏　樹
第４８期生　鳥　畑　聡　子

【記念試合Ｇｐ】

長　第４４期生　杉　山　智　彦
第３８期生　牧　野　貴　志
第４２期生　塚　本　　淳
第４７期生　十　二　賢　眞
第５５期生　杉　野　寿美代

【祝賀会Ｇｐ】

長　第３９期生　中　尾　　圭
第４４期生　野　末　拓　磨
第４４期生　鐘　江　和　枝
第４７期生　大　町　　真
第４９期生　市　川　靖　二
第５１期生　小　谷　　翠
第５１期生　服　部　多　恵

【記念誌Ｇｐ】

長　第４０期生　金　野　浩　子
第４２期生　沖　　賢　治
第４４期生　渡　邊　将　寛
第４６期生　中　川　　彰
第４７期生　古　賀　健一郎
第４７期生　藤　田　晋　介

【防大支部】

総監督　第４２期生　末　本　紀　彦
補佐　第５１期生　来　栖　正　則
男子監督　第５４期生　朝　槻　一　仁
助監督　第５８期生　川　上　智　寛
助監督　第５９期生　佐　藤　寛　樹
女子監督　第４３期生　向　田　　淳
助監督　第５７期生　假　屋　はるか
助監督　第５９期生　林　　文　乃

【記念品Ｇｐ】

長　第４５期生　町　元　直　美
第４８期生　渡　辺　智　江
第４９期生　川　原　輝　生
第３７期生　荒　木　紀　雄

【ユニフォームＧｐ】

長　第４４期生　杉　山　智　彦
第４４期生　渡　邊　将　寛
第４４期生　野　末　拓　磨
第４４期生　鐘　江　和　枝

【会計Ｇｐ】

長　第４２期生　針　北　和　文
第４７期生　栄　谷　英　樹
第４８期生　手　塚　洋　光
第５７期生　田　中　拓　己

編　集　後　記

６０周年記念行事準備委員会記念誌Ｇｐ

編集後記を執筆している今日、平成３０年度秋季リーグにおける防衛大学校ホッケー部女子チームの一部入れ替え戦が行われましたが、惜しくも１－２で学習院大学に敗れ、６３期政権での一部返り咲きは成りませんでした。彼女たちの４年間の詰まった見ごたえのある試合でしたが、２部残留という結果と、勝利を得られなかった悔しさが、ホッケー部の歴史と彼女たちの記憶に刻まれることとなりました。防大ホッケー部の歴史の中で、多くの先輩方がそうであったように、今後の人生において、この経験を超える何かに向かって進んでいく原動力ともなっていくことでしょう。

このたび、防衛大学校フィールドホッケー部創設６０周年を記念した「創設６０年記念誌」が無事発刊の運びとなりました。記念誌の作成にあたりましては、多数の皆様にご寄稿頂きますとともに、資料や写真をご提供頂くなど、ご支援、ご協力を頂きましたこと、厚く御礼申し上げます。

６０周年記念誌は、「歴史と伝統：未来へ繋ぐ」をテーマに、１０年前に作成された５０周年誌以降のホッケー部の活動を主体として構成しつつも、創設時からの歴史と伝統が伝わるよう、次のポイントでまとめました。

○寄稿文は、５０周年記念誌以降に防大を卒業した各期に加え、１０期代、２０期代、３０期代、４０期代の代表者に依頼

○競技規則については、過去からの変遷を踏まえつつ、最新のルールについて４０期以前のＯＢ・ＯＧが観戦及び指導にあたる際に必要な視点から解説

○戦績記録は５０周年以降の期としたものの、戦績の変遷については創設時からの推移がわかるよう整理

○初代からの期別名簿に出身県、出身校を掲載することで、未来へ繋がる材料を提供

防大ホッケー部創設６０周年を迎える１年以上前に立ち上がった６０周年記念行事準備委員会は、市ヶ谷基地（駐屯地）に勤務するＯＢ・ＯＧと防大指導部で構成され、小原台ホッケークラブ事務局組織とのダブルキャップでの活動となりました。委員の中には５０周年の際にも記念行事に関わった者もおり、再びこのタイミングで市ヶ谷あるいは防大で勤務していることに運命的なものを感じております。

６０年の歴史の中で、一人一人がホッケー部へ直接関わった時間はたったの４年間かもしれませんが、防大ホッケー部の歴史と伝統は確実に繋がっています。すべてのＯＢ・ＯＧ、現役学生がその流れの中に身を置いていたということを、今回、６０年を振り返ることで是非実感して頂きたいと思います。

最後に、防衛大学校フィールドホッケー部の更なる発展と関係各位並びに小原台ホッケークラブ会員各位のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

平成３１年１月発行

編　集　防衛大学校フィールドホッケー部創設６０周年記念行事準備委員会　記念誌Ｇｐ
Ｇｐ長　金　野　浩　子（第４０期生）　編集長　沖　賢　治（第４２期生）
Ｇｐ員　渡　邊　将　寛（第４４期生）　Ｇｐ員　中　川　彰（第４６期生）
同　古　賀　健一郎（第４７期生）　同　藤　田　晋　介（第４７期生）
協　力　町　元　直　美（第４５期生）
発　行　防衛大学校フィールドホッケー部・小原台ホッケークラブ

DEFENCE ACADEMY HOCKEY ASSOCIATION